

三方善の思想と実践

—— 倫理道德の深化のために ——

永安 幸正

(研究センター教授)

内容要旨

人類は真、善、美、聖、利というような根本価値を有するが、その中で倫理道德というものの役割は、善の価値からすべての行為を測定評価し、人々をして善を高めるように導くことにある。この領域では、人間のあらゆる行為は善と悪の尺度から評価される。倫理道德とは、専ら人間の善と悪の価値と指針とに関係する専門領域である。

その場合、善は二つの方法で分類される。一つは目的善と手段善であり、もう一つは私的善と公共善である。目的善は、幸福つまり安心と喜びという精神的な善であり、外のあらゆる善はそれを実現する手段としての善である。私的善とは精神と身体の健康のような内的善と、外部の物質の情報、地位、名誉などの善であり、公共善は各人が利用することはできるが私的に所有できない善で

ある。人類社会の希望は、目的善を各自の間に公平に実現し、それに付随して手段善も適度に分配されることであり、正義の実現にある。正義を自己、相手方、第三者に、公平に実現することを三方善と呼ぶ。

善の概念を用いると、善を再生産するプロセスを表わす三段階からなる理論を構築することができる。つまり、第一は受善であり、自然界と歴史の先人からの善の種子を受け取ることであり、第二は育善であり、種子を発芽させ大成することにある。第三は讓善であり、増産された善を用いて自然界の保全に投資し、恩人に孝養を尽くし、子孫を育て、将来のために投資するのである。これの全体が積善と言われるものである。

ところで、三方善を実現するには、公共財というものを用いざるを得ないが、それを通じて第三者にしばしば危害を及ぼすことがある。「コモンズ」(共有地)の悲劇と呼ばれる問題を含め、こういうマイナスの効果をいかに少なくするかが、広い社会での三方善の課題である。人類はこの点ではいまだ十分に満足できる方式を開発していないのである。そこで、会社という現代社会の有力な主役を引き合いに出して、困難の中でも、どうか三方善を実現する方法を考えてみる。

結局、われわれは、まず自分の善を実現することから始め、それをできるだけ危害のないような方法で行うことに努めればよいのである。万里の道も一歩からである。そして、われわれは、善を生み出す最も根源的な生産力、「生産力の生産力」というものに着眼したい。それは人間の精神善であり、精神の中でも特に叡智である。これはもともと核心的な意味での善であり徳といってもよ

い。

以上のように考えると、われわれは人類の精神史に見出される徳と報徳、恩と報恩、恵みと愛の実行、善と積善という対応概念を統合する道が開けることを知るが、その展開は次の機会に譲ろう。

キーワード…倫理道德、善、目的善、公共善、善の再生産理論、三方善の実現、生産力の生産力

目次

- 一 三方善の考え方
 - 二 善の観念と三方善
 - 三 善と正義と三方善
 - 四 善の再生産理論
 - 五 善の再生産と公共財の働き
 - 六 会社の経営と三方善——一つの応用問題——
 - 七 三方善と黄金律の実現
- 【資料】三方よし——中田中氏の記録
【補論】三方善研究に役立つ諸理論

一 三方善の考え方

(一) 「三方よし」の理念とその起源

古来、人はみな誰でも、心の成長の初めにおいては、他人の利益のために尽くすより、わが身大切、自己利益第一、と考えるものようである。それは生物の「本能」によるのであろうか。

昔むかし、地獄のあるテーブルに、腹をすかした餓鬼たちが群がっていた。その食卓には手よりも長い箸があり、皆が一方の端をつかむという方法でしか使えないようになっていた。そのため、餓鬼たちはせっかくのテーブルの上にご馳走があるのに、自分の口に運ぶことができないで、大騒ぎしていた。そこに仁者がやってきて教えた。「皆さん、考えを変えなさい。自分の箸を使って直接自分自身の口に食べ物を入れようとせずに、お互い、他の人たちの口に向けて食べ物を持ってあげればよいではないか。」餓鬼たちはやっと思腹を癒すことができたという。

これは、自分は自分の力だけで生きるといふ利己的な自給自足（アウタルキー）が不可能であるという事実を述べ、相互扶助の精神とその偉大なる効能を教え示すものでもある。人類社会の歴史は、各人の私利を高めつつも、各人のそれをいかに共存させていくかについて、その方法を探究する歩みにほかならないといえようが、いつになつたら、人は地獄の餓鬼の状態から脱出できるのだろうか。それにはどうすればよいのであろうか。

ところで、現在の滋賀県は近江商人の発祥の地であるが、そこには「三方よし」というものの原型が存在するといわれる。つまり、自分にも、相手にも、第三者にもよいという意味での商いの道である。もちろん、「商人」といつても、単に売り買いのみでなく、モノづくりの「産地」と結びついた人々である。『三方よし』という雑誌には、近年その原典と推定される商家の家訓が発見されたという報告記事が載っている。

同志社大学の末永國紀先生の研究によると、その家訓とは、江戸中期、五個荘（現、神埼郡）の商人、中村家六代目、惣兵衛宗岸（十八世紀中期の宝暦七年没、享年七十三）の「書置」であり、それを岩手県の士族、井上政共という人が著書『近江商人』（一八九〇年）において紹介したものが、いわゆる「三方よし」の理念の典拠となつたとされるのである。

宗岸自身の書置から引用してみよう。

たとへ他国へ商内に参候ても、この商内物この国の人一切の人々皆々、心よく着申され候よ

うにと、自分の事に思わず、皆人よく様にとおもひ、高利望み申さず、とかくとかく天道めぐみ大事と、只そのゆくさきの人を大切におもふべく候、それにては心安堵にて、身も息災、仏神の事常々信心に致され候て、その国々へ入る時に右の通りに心さしおこし申さるべく候事、
第一に候」

これは「着申され」とあるから、織物・衣類の商売のことであろうが、子孫に残されたこの「書置」の主意は、善因善果といつて善い行為には善い報いがあり、その逆に悪因悪果もあつて、そうした天道の働きを信じなさい。仏や神を信じ、いづくに住む人々とも、同朋と心得て別け隔てなく商売し、自己の高利を貪らず、公平妥当な利のみを期待しながら、行商して歩きなさい、という教えである。もちろん、この書置の中には特に「三方よし」という言葉は出て来ないが、その理念と原則は含まれていると解釈してよいと思う。

これは、ややもすれば「旅の恥はかき捨て」という風潮が見受けられる中での優れた商業道徳であつた。このような精神と行為原則こそは、日本に限らず、世界中で、永続している偉大な商業中心地に、またビジネスのみならず、教育でも、医療でも、あらゆる人間活動において、見いだされるものであろう。

ちなみに、近代経済社会の学問的解明のゆえに「経済学の父」とも称される英国のアダム・スミス（Adam Smith・一七二三―一七九〇）は、社会の調和を論証しようとした。各人は市場の中で

利己心 (self-interest) 自己の利益とそれへの関心) に衝き動かされながら仕事をし商売をするが、実は競争市場という仕組みは「各人の利己心の高慢の鼻」をへし折って、各人の心と行為を神の「一般原則」(general rule) というものに従わせ、結局、人々に富の生産を促進させ、公平な利益の分配をもたらす、というのであって、このような社会を「自然的自由の体制」と呼んだ。

スミスの哲学は、同業組合(ギルド)など束縛の多い不自由な時代から自由の時代へと解放された人々の人間性の見方についていささか楽観的過ぎたがゆえに、歴史の行く末を見通せなかった。その後は、荒々しい資本主義が発生した。それでも、スミスは、競争という仕組みを通じての商売が、私的利益のみを追求し「一方善」を優先する貪欲な「利己心の鼻」をへし折るのだ、という認識をもっていたのであり、その点は注目に値する。

昔、田舎にあった「流れに浸けて芋を洗うカゴ」は、皮をむくのみでなく、少しだけだが芋の凹凸を均す働きをするのであったが、そのように利己心は利己心とぶつかり合うことで、少しは矯正できると、スミスはいうのであろうか。

〔注〕

(1) AKINDO会議・同委員会内(大津市)『三方よし』第九号(一九九八年十二月)を参照。ルビ引用者。なおこの記事は、永年の知己、滋賀県の長浜

市在住の清水商会社長、清水實氏のご教示による。ここに記して篤く感謝したい。

三方善という考え方は、十七世紀初め、鈴木正三

の示した「商人の指針」にも見られ、正直の徳を軸に、次のように言われている。

「商売を行おうとする人は、先ず利得の増えるような心遣いを修行して身につけなくてはならない。その心遣いとは他でもない、すべて自分の身命をあげて天道に順い、一筋に正直の道を学ぶことにある。正直の人には、いろいろと天の恵みが多く、神仏の加護を恵まれて、災害を免れ、おのずから福利が増え、すべての人の深く敬い愛し合う結果を頂き、万事に思いどうりに行き願いが満たされるところとなる。」(『万民徳用―商人日用』鈴木鉄心編『鈴木正三道人全集』山喜房仏書林、昭和五六年、六版、七一ページ。現代文訳は永安)

鈴木は戦国時代に三河の徳川配下の武士に生まれ、関ヶ原の戦いに参加し、(おそらく当然に神道の思想を受けつつ) 儒学を学び、後に仏教の修行を重ね、鳥原の乱を機縁にキリスト教との対決も試み、江戸時代において土農工商という国民各層に当てはまる職業の倫理・道徳を説いた。(島田燁子『日本人の職業倫理』有斐閣、一九九〇年、六四ページ)

なお、日本の歴史を近世にまで遡り、そこに現れた経済行動の指針を通観する研究は多くないが、特

に資本主義の発達との関連でそれを行ったものに、土屋喬雄『日本経営理念史』(復刻、麗澤大学出版会、二〇〇二年)がある。土屋氏は、江戸時代初期と後期の商人の経営理念として石田梅若ほか、儒教倫理を基本とする経営理念として澁澤榮一ほかの経営者、それにキリスト教倫理を基礎とする波多野鶴吉や相馬愛蔵そのほか代表的な経営者を取り上げ、その哲学と行動を紹介する。この版には『続日本経営理念史』の序も付録として載せられていて、明治以後の日本の産業発達を通じて、①科学技術を受け入れる理念、②株式会社方式の経理理念、③科学的管理法を受け入れる理念、④キリスト教理念の影響の増大、⑤資本主義的な競争経済への疑念の保持、というような特徴が示されると述べている。

儒教的な理念には「天下は天下の天下なり、私せず、公とすべし」という思想軸が貫通していて、利は義(公正としての正義)に導かれるべしという行為原則・三方よしの理念が存在する。また、キリスト教には隣人愛(地の国における神の正義と愛の実行)の考えがあるから、そこにもまた三方よしと通じる理念が貫徹していたわけである。かたや日本神道では、日本仏教では、どうであろうか。

(二) 二宮尊徳の「売ってよろこび買ってよろこぶ」

ところで、古くからある標語のようだが、「売ってよろこび買ってよろこぶ」という標語がある。これは誰が言い出したのか正確には知らないが、江戸時代末期に活躍した二宮尊徳（一七八七―一八五六）の教えにも見られる。小田原にある某衣料品店などは、この言葉をモットーとするが、それは尊徳の教えを基にするものという。なお、「よろこぶ」には「悦ぶ」と「喜ぶ」という二つの異なった漢字表現がある。

すなわち、二宮尊徳の言葉を記した福住正兄『二宮翁夜話』に、次のような節がある。

わが道は全樂の道

翁のことばにいう、世界のうちで法則とすべきものは、天地の道と、親子の道と、夫婦の道と、農業の道との四つである、と。これらの道はまことに両全りょうぜんのもの、完全なものであって、すべてのことは、この四つを手本とすれば間違いない。

私が「おのが子を恵む心を法のりとせば 学ばずとも道に到らん」とよんだのは、この意味なのである。どうしてかといえ、天が生命の根元の徳をくだせば、地はこれを受けて万物を発生させる。親は子を育てるのに損得を忘れて、ひたすらその生長を楽しみ、子は育てられて父母を慕う。

夫婦の間でもお互に楽しみ合って子孫が相続する。農夫は勤勞して植物の繁榮を楽しみ、草

木はまたよろこんで繁茂する。みんな、ともどもに苦情がなくて、喜悅の情ばかりなのである。さてそこで、この道に法のりとるならば、商売のしかたは、売って喜び買って喜ぶようにするべきである。売って喜び買って喜ばないのは道ではない。買って喜び売って喜ばないのも道ではない。また、貸借の道も同様に、借りて喜び貸して喜ぶようにするべきである。借りて喜び貸して喜ばないのは道ではないし、貸して喜び借りて喜ばないのも道ではない。百事すべてそうである。⁽²⁾（ゴチ、ルビ追加、永安）

これは相互全樂とも言い得る指針であるが、もちろん、樂といっても単に「今がよろこびであればよい」という刹那主義せつなのよろこびではなく、先の先まで物事の行く末を見通しての安定の法に則る行為から生じるよろこびであり、用意周到な計算のうえに得られるよろこびなのである。

もちろん、この「売って喜（悦）び買って喜（悦）ぶ」という標語は、文字どおりではないにしても、そういう思想を含む文言まで含めると、その起源は洋の東西、時の古今に及んで、まことに広範なものである。経済学でも古くから交換を効用理論で説明するけれども、結局、この標語に相当する内容を物語っているのである。ただ、問題なのは、効用（utility）の内実である。それが利己主義にまで逸脱した効用なら、いくら三方向に対して広く実現したとしても、人間界によい効果を与える善ではありえないのである。

(2) この箇所は、『二宮尊徳全集』(復刻・龍溪書舎、一九七七年)第三十六巻の二二九―二三〇ページに見え、門人集『福住正兄選集』の『二宮翁夜話』巻之二、二二八―二二九ページにある。ここでは、現代報徳全書(一円融合会・報徳文庫)八として収められている佐々井典比古訳注『二宮翁夜話』上、一〇二―一〇三ページから引いた。筆者の質問に対し、報徳博物館には親切かつ迅速にご教示に預かった。篤く感謝申し上げる。現代訳文では、筆者が少し表現を変えさせて頂いた。

廣池千九郎(一八六六―一九三八)は、日本史の総合百科事典ともいえる『古事類苑』の編纂に長年たずさわり、日本の故事来歴に極めて広く深く通じていたうえに、『モラロジー』(道徳科学)という広大な学問を樹立した(『道徳科学の論文』昭和三年初版、改訂版、モラロジー研究所より刊行)。廣池は「売ってよるこび買ってよるこぶ」を当然知っていたと思われるが、売り買いの心の持ち方について、次のように述べている。

売るにも買うにも争わず他人を尊重す

日本においては、従来、物品売買のときに、先方の物品を中傷してその代価を減殺せんとし、さていよいよ売買の約出来れば、その物品を掴み取るのであります。しかるにもし買ひ人が掴み取らざるときには、売り人は粗悪の品を提供するのであります。かくて双方ともに不正の念に駆られておる人が多いのであります。故に、一般の売買関係はあたかも敵味方の関係のごとき有様であります。

いま、最高道徳においては、相互にその人格を尊重して、売る者は買う者を欺かず、代価を精確にし、且つ及ぶだけその代価を低廉にするのであります。次に買う者は売る者を軽蔑せず、みだりに物品を中傷せず、代価の減殺を要求せず、且つその物品を掴み取るがごときことをせぬのであります。しこうしてその価額・受け渡しの方法、その他すべての事につきましては、正義と慈悲との精神をもつて、温和にこれを協定するのであります。しかるに相手方が甚だしく不正なる場合には、一時多少の困難を感じるも、やむを得ずその取り引きを中止して時を待つか、

もしくは他に相手方を求むるのであります。

〔道徳科学の論文〕⑨三五八―三五九ページ)

「争わず」というのなら、会社と取引業者との値段交渉は、いい加減に緩くするのかもしれないと、断じてそうではない。つまり、双方とも天地自然の資源を頂いて製品を作り、それを購入して使用したり消費するのであるから、製造する側は、コスト削減や傷のある商品を排除することを含めて、出来る限りの工夫をするのがその努めである。他方、購入し使用し消費する側としては、技術上のニーズ、消費に際して地球環境破壊にならない種類の人間的ニーズを考え、作る側に品質の改善とコスト引き下げを求め、事故を起こさないために、使用法の説明を要求するのは、当然の義務である。こういう努力をすることは、双方にとり、当然の行為原則である。ここには、取引者同士の、同業者同士の競争と、消費者からの厳しい吟味とが、ともに作用するのである。(なお、廣池の右の記述には、筆者のルビを加えた。以下、他の引用も同様。)

なお、競争とはコンペテールというラテン語にその起源があり、「公共の善の実現に向けての競り合

い」のことであるといわれるが、この点は「三方善の経営」(モラロジー研究所、六一―六二ページ)を参照されたい。

日本社会では伝統的に、競争というものはあまり好ましくないものという観念が存在してきている。猪瀬博氏は、つとに「センター・オブ・エクセレンス」の提唱者として重要な役割を演じられたが(猪瀬博『センター・オブ・エクセレンスの構築』日経サイエンス社、一九九〇年)、競争ということについて、次のように注目すべき観点を示しておられる(二〇〇〇年当時、国立情報学研究所所長)。

「競争する (compete) という語は、ラテン語の competere に由来する。com は〈共に〉の意、petere は〈求める〉の意であって、従って com-petere とは、〈共に求め合う〉を意味する。何を求め合うのか? それは必ずすなわち人類の理想である。理想を求め合うとき、人々はお互いに助け合い、また競い合うことによって切磋琢磨に努める。互いの欠点や誤りを是正し合い、かつ互いの美点や正しさを認め合うことによって、理想を追求するのが、真の競争の姿でなけ

ればならない。競争力とは、自己鍛錬の力でないければならず、権力、駆け引き、詐術などを駆使しようとする力であってはならない。競争の目的は人類の理想の追求だからである。「(総) 合的競争力を求めて」、科学技術と経済の会

『技術と経済』二〇〇年一〇号。

このように考えれば、競争は「胡散臭いもの」として疑問視することはない。正々堂々としのぎを削ればよいのである。

(三) 廣池千九郎による「三方善」の提唱

われわれ人類が理想として求める社会は、この世に生を受けた人が誰一人除け者にされず、例外なく、各人のいのちの可能性を開拓し尽くして大往生していく社会であろう。このような理想なしには、われわれはどこに行くべきか定められず、その日暮らしの荒んだ生活に止まることになりかねないであろう。ことに激烈な競争に追いまくられ、詐欺まがいの手法が横行する商売の世界では、良心的な人々の神経は疲労させるを得ない。誰しもどうにかして、正しく、いな、正しいだけでなく力強くなれる——没落せず永続する——生き方の指針を手に入れたいと欲するのである。

廣池千九郎は、大正年間から昭和十二年頃までの、その実地の経営指導、自身の行為指針、及び『道徳科学の論文』における体系的記述において、しばしば「三方よし」、もしくは全体の善あるいは幸福を図るという意味で、「三方善」の哲学や思想を語っている。

廣池における最も有名な三方よしの実例としては、昭和初年、山口県は山陽線沿いの小駅、戸田(へた)におけるタクシー乗車の際の体験記録がある。それは巻末【資料】に掲げるとおりで、第

一にタクシー乗車の依頼者である廣池及びその随行者たち二名の計三名と、第二にタクシーの運転手、第三に同乗を頼んできた第三者二名、という三つの利害関係者の間での料金負担の比率及びそれを支えた哲学が語られている。昭和初期における『道徳科学の論文』には、ウイリアム・スマートの利他主義経済学を紹介しつつ、それは一面的だと批判し、完全なる経済組織のあり方を、次のように述べている。

人間の幸福は自己利益によりてのみ得らるべきものでないと同じく、自己犠牲によりてのみ得らるべきものでないであります。

完全なる経済学及び経済組織は、必ずや(一)自己、(二)使用人、(三)原料もしくは商品の仕入先、(四)販売先、(五)需用者、(六)一般社会(需用者の喜ぶことにも一般社会を害することあり。故に需用者と一般社会との利害必ずしも一致せず)、及び(七)以上全部を統制するところの国家に対して、その各方面がおのおの相当の利益を得ることくに組織されておらなくてはならぬのであります。

しこうして以上の全部を円満に調和するには、自己には、自己まず主として精神的に且つある場合には多少物質的に犠牲を払うことは当然であります。それはやむを得ざる場合のことであるので、経済組織の原則を単に物質的なる自己犠牲に置くことはまた不当であります。

『道徳科学の論文』⑧五九ページ

これは、理想的な経済システムが、利己主義のみに基づくものでもなく、また逆に単純な利他主義・自己犠牲主義のみによるものでもなく、利害関係者の間に共に適切な利益分配が保障され、三方に善となるようなものでなくてはならないことを意味する。

そこで、先ずここにいう「利益」とは、いかなる内容のものを指すのであるか、次に三方とは誰と誰と誰をいうのかが、問われねばならない。この「利益」というものが、以上に見た善の別表現であることは明白である。その際、単に「売ってよろこび買ってよろこぶ」という自分と相手との二方の間の関係だけでなく、第三者、さらには国家社会の善にまで目配りをした上での行為が求められており、「公共善」(公共財)への配慮が必要だとしているのである。

われわれは、そもそもなぜ三方善(三方よし)というものを、理想としてあるいは義務として、掲げる必要があるのだろうか。あるいは、三方善を目指す行動は、そうでないものと比べて、どのように有益な効果を生むというのであろうか。

〈注〉

(3) 廣池の文章は、第一次世界大戦後、大正年間から昭和初めの世界史を背景とするものであり、ソ連における社会主義の出現、特に日本におけるマルクス

主義に基づく階級闘争主義に対する思想的、実践的
な対応という時代の要請に応じるものであろう。

望ましい経済活動は道徳的ないし倫理的なもの

いうことになるが、その際、往々にして、利己主義を批判するあまり、反対に自己犠牲すなわち利他主義に傾く行動を推奨するという逆の極端に走るならば、一見理想的に見えても実は永続せず、無益で、弱体の行動を指し示すだけに終わる。実際上に効き目のない倫理道徳説では意味がない、それを乗り越えることが必要と、廣池は見たのであった。

思うに、廣池千九郎が三方善ということを強調す

るゆえんは、当時すなわち第一次大戦後に空前の戦争成金が簇生した^{すくま}こと、あるいはその後の深刻な反動不況の中で実業人の取った行動が、生きたために無我夢中の利益漁りに走り、多くが直ちに没落したことである。こうした資本主義経済の弊害や拝金主義の有害さをつぶさに観察して、どうにかしてまともな実業活動の指針を、わかりやすい標語で表そうとしたところに、廣池の意図はあった。

二 善の観念と三方善

(一) 目的善と手段善

さて、三方善という善もしくは利益とは何かを確認しなくてはならない。そのために、善の概念と種類を明らかにしよう。善には、内的善と外的善、目的善と手段善、私的善と公共善、という三種の分類が成り立つ。

① 目的善

これは、人間の行為の面から、目的と手段というものを関連づける善の定義である。われわれは、心と体の両者を統合して人間の「行為」の善という概念を考えることができる。行為とは人間が目的を立て、その目的を実現するために自らの心と体を用い、手段すなわち次に述べる手段善を動員

図1 善の種類と成り立ち

私と公共 目的手段	私的善 (財) : 個人	公共善 (財) : 社会
目的善 (内的)	個人の心身の善 ①安心と喜び ②健康・長寿 ③行為	集団の心身の善 ①平和 ②衛生と健康 ③集団の行為
手段善 (外的)	私有物 ①知識、習慣 ②物財 ③人間関係 地位、信頼度	公共物 ①社会の知識文化 ②社会の公共資本 ③社会の制度、組織 治安、平和

注) 善は価値であり判断であって、真(真偽)、善(善悪)、美(美醜)、聖(聖俗)、利(利害損得)という人間の根本価値のうちの一つである。価値である善は、人間が抱く精神的な判断・感情であるが、それは媒体物(担い手、メディア)に乗り、媒体物との関係におかない。抽象的な性質を有する善は、そういう物質判断は具体的なものはならない。抽象的な性質を有する善は、そういう物質や情報によって担われる。善の価値を担うものを財(goods)と呼ぶ。善の種類は、それを担えるメディアの種類を求める。

していく活動をいう。それゆえ行為は、心の活動つまり内的善の活動であっても、必然的に外部に向けての局面が現れる。

先ず、目的善とは、トマス・アクイナスにならつていうならば、内的善 (internal goods) であつて、人体の皮膚内部に存在する心と体の状態を指す。心の善を精神的善、体の善を身体的善と名づけて一応区分することができる。⁽⁴⁾ 「一応」と言うわけは、今日の科学的見地からすれば、心と体とはそれほど明瞭に区分することはできないからである。心の善は安心と喜びであり、体の善は健康であつて、身体障害はこの体の善の一部が欠如している状態を指す。しかし見た目に身体障害があつても心の善が障害を受けるとは限らない。逆も然り。

なお、もつと深く考えれば、この心の善つまり精神的善は、すべての善を生産する働きである「生産力」を有するが、生産力の核心に、そういう善を生産する生産力のまた「生産力」が存在する。それが徳 (virtue) とか品性 (character) と呼ばれるものの本質である。

②手段善

われわれは、やはりトマスにならつて、心身の外にある善を外的善 (external goods) と呼ぶ。外的善は物質と情報とからなり、物質善は物的な財、例えば自然環境、機械設備、金銭に表れ、また情報善は社会の制度やルール、知識、文化などの非物質的財にも表れる。この外的善は、目的善を実現するために使われる「手段善」である。

ただし、われわれは、心と体という内的かつ目的の善を手段善として使うこともある。安心と喜

びという目的を得るために、いわゆる「積極思考」(positive thinking=プラス思考)を用いるとすれば、今の心を手段善とし、それよりもすぐれたより良い心を目的善として実現しようとすることになるのであり、心身は目的ともなり手段ともなる。

時にはわれわれは、自己の目的を実現するために他の人間を手段として位置づけるといふ行動に走る。それは、イマニュエル・カントが述べたように、人間の相互依存関係の中においては避けることのできない宿命であり必然性であるが、やはり他の人間の存在を手段としてのみ位置づけるのではなくて、常に目的としても位置づけるといふ態度が望まれる。⁽⁵⁾

(注)

(4) トマス・アクイナス(一二二五〜一二七四)は、中世カトリック神学の最高峰であつて、主著に長大な「神学大全

(Summa theologia) があり、専門家によるその日本語訳が、一九六三年以来、創文社から刊行中である。トマスは、人間における善を内的善と外的善とに区分している。なお、上田辰之助「トマス・アクィナス研究」(著作集第二巻、みすず書房)を参照。トマスの善の分類の紹介については、特に一一四ページを参照。

われわれ人間の究極的な目的は、私的善としての内的善のうちの「幸福」(観)にはかならないといえる。幸福(観)の研究は古来、汗牛充棟、夥しい数にのぼるけれども、さしあたり近年の体系的な研究としては、新宮秀夫「幸福ということ」(NHKブックス、一九九八年)をあげたい。また、神谷美恵子「生きがいについて」(みすず書房、一九六六年)は一つの「幸福観」の研究として、もうすでに現代の古典といえる。

最近、こうした幸福論をとらえ直し、ビジネス活動、特にマーケティングと人間の幸福観を取り扱った大橋照枝「心はつかめる!「幸福の法則」マーケティング」(宝島社新書、二〇〇三年)が出版された。内面の心の態度(attitude)だけに向かってしまっただけで、外的善とのかかわりの考察を看過しがちな

まり「人倫」の原理とした。すなわち、人間は自己の目的を遂げるために、どうしても他人をその手段とせざるを得ないけれども、同時に他人を目的とし、自己をその手段とせよ、と。

例えばわれわれが、自分の利益のために工場で物をつくり相手に売るとすれば、自分(の利益)を目的とし、そのため相手を手段として位置づけることになるのだが、その売り買いがうまくいくには、相手(の満足)を目的とし、自分(の活動)をその手段として、相手の満足のために奉仕しなくてはならない。自己の目的を達するには、自己を相手の満足という目的のための手段と位置づけて、徹底的に相手に奉仕するほかないのである。

このカントの説について、高峯一愚教授は、次のように紹介している。国とは、多種多様な人たちが、同一の法律に従って結合する社会であるが、そこで各人が、「さまざまな欲望の対立の間に晒されながらも、それのみ囚われず、理性に従って道徳法則に従おうとする人格としての本来の自分を、実現の目的とすると同時に、同じくそのような他人をも実現されるべき目的として尊重し、決して単に手段としてのみ用いることがない」なら、それは「目的の

幸福論では、物の役に立たないが、そのように不十分な幸福論を組み立て直し、日々の厳しい競争と企業活動にも応用できるようにするための探求として、本書を推薦したい。大橋氏は、もはや従来型の物の豊かな生活が人々の幸福感を満たせなくなったという生活文明段階説に立ち、新宮氏の理論を踏まえて幸福の段階を、①快適・癒し、安全/安心、②五感と時間・空間の充実、③感動・遊び、④創造、自己実現・情報の受信・送信という四段階とし、それに応じた「マーケティング」の法則を具体例を示しながら説明する。そして最後に、人工だけを追求したこれまでの型の工業主義的文明を乗り越え、「バイオリジヨナリズム」(生態的地域主義)という、人工と自然を高い次元で統合する新たな文明を展望しつつ財貨サービスを求める幸福感、そしてそれを満たす挑戦が、すでにあちこちで始まっているのだという。人類が求める「よきもの」はいま大きな変革期にある。

(5) イマニュエル・カント(一七二四—一八〇四)はドイツ人といわれるが、今日のバルト三国の一つに所属する都市ケーニヒスベルクに生をうけ、相互性(mutuality)をもって市民社会の人間関係の原理つ

国」の名に値する国である。ここでは、国民は各自が元首であり、かつ国民であって、自由の保持者であることになるから、この国は「自由の国」「人格の国」でもある。(カント講義)論争社、一九八一年、一九九ページ。ゴチ、永安)

また、高峯教授は、さらに重要な点を指摘している。いうまでもなく、人生においては何でも最善を尽くすことは重要であるが、それは目的のために手段を選ばないということではなく、「手段そのものにもまた目的がおかれることでなければならぬ。……日常生活万般について、……手段もまた人間にとって、それ自身が人間の目的をなし、その一つのの実現に目的としての意義と満足とを求め得るものとして解さなければならぬであろう。」(二〇二ページ)

これは往々にして看過しがちな点を警告する大切な見解である。倫理道徳の論議においてしばしば見受けられるような、動機・目的説と結果説との対立は、意味がないのである。前出の廣池千九郎は、「動機・目的・方法にも誠を尽くす」という格言を遺している。三方善の実現のためには、筆者は、さらに「結果についての解釈、受け止め方」において

も、誠を尽くすことが望ましいと考える。

こうした点は、人間の相互性についての明白な事実であり、人間的社会の永遠の真理である。つまり、すべての人の人格を相互に尊重し合うべきだという互敬 (mutual respect) にかかわるのである。このような市民社会の根本問題については、難波田春夫「スミス・ヘーゲル・マルクス」著作集第二巻(早稲田大学出版部、一九八二年)を参照。全編がこの「市民社会の問題」への取り組みからなる。この本は、初め大東亜戦争が終わってしばらくしてマッカーサー占領革命の最中に書かれたもので、欧米社会の思想的原理を問う。同じく「民主主義の弁証法」(著作集第九巻所収)と併せて価値が高い。

ついでに、人間の運命と三方善との関係について無視できない論点に言及しておきたい。それは、イマニュエル・カントの問いともかわるところであって、すなわち善悪の因果応報論は、この世での善悪の差し引きのみでは足りず、「死後の魂の運命」をも考えに入れなければ、収支決算がつかないのではないか、ということである。

現代の日本人の多くは、どうやら国民文化として「靈魂の觀念」を失いつつあるといえるが、その精

神的傾向がこの現世の生き方に不安と自信喪失をもたらし、子供や大人にまで「キレル」現象を生み、犯罪を多発させることになっているのではないか。

現世で正当な善行が正当な善の報酬を与えられなくとも、来世において正当な報酬が与えられるという過世・現世・来世の三世にわたる人間観・因果律観は、善の収支決算を完結させるものであり、今のこの世で報われなくとも、来世において報われるという希望を保証し、人々の生きる力を高めるのではないか。この希望も、そしてその希望から生まれる生きる元氣もまた、重大な善なのではないか。元來、日本の神道、仏教などは、明瞭にこの確信を庶民に与えるものであった。

周知のように、欧米のキリスト教の世界では、プロテスタントが、「聖書」の中の真理を実行し、「救いへの確信」を得るため労働に勤しむが、このことにより、経済発展が欧米のみで達成されたという。しかし、何も欧米キリスト教だけでなく、今日のわれわれの日本文化にも、今日の中国やインドにも、アラブにも、資本主義の創造でなくとも、歴史の創造に結びつく善の考え方があり得るのではないだろうか。こうした論点は、小室直樹「日本資本主義崩

壊の論理」(光文社、一九九二年)を参照。本書は日本経済のバブル的暴走を告発する論法はまことに鋭いが、些か「古いタイプの思い込み」が先行し過

ぎてはいはないか。ヴェーバー的なパラダイムは掘り下げて吟味し直すべきである。なお併せて、「日本人のための宗教原論」(徳間書店)も参照。

(二) 私的善と公共善

われわれはさらに、人と人との相互作用の仕組みを明かにするために、もうひとつの観点から善を分類しておく必要がある。それは善の価値の担い手である財貨の性質の違いによる分類である。

① 私的善

これは各人の私的な所有に帰する善のことであって、各人の内的善と、外的善のうち各人の私的所有に属する善とから成る。先ず各人の心身の善は、肉体と、頭脳の内部に蓄積された知識と、心身内部の神経系の働きであるさまざまな感性(感情)とから成るといえる。

次に、外的善のうちの私的善には、各人の物的あるいは金銭的な資産、各人のプライバシー領域にある知識で例えば特許などと、各人の私有財産としての文化的情報で例えば家元としての資格やブランドなどが挙げられる。さらには、その人に所属する人柄や行為習慣と社会の地位や名声や信用なども、この私的善に入る。この私的善は広い意味での徳というものに等しい。

② 公共善

公共善とは、人類社会の中の私的善以外のすべての善——目的善及び手段善——である。その担

いが、いわゆる「公共財」(public goods)、または「公共物」(commons)と呼ばれるものであって、これも物的なものと情報的・文化的なものという二つのグループからなる。物的な公共財は、宇宙と地球がその根本であって、人類の生命活動すべてを支える本源的な公共物である。そこから派生的な物的公共財には、人工物質からなるシステムがあつて、例えば港や道路、空港、漁港、上下水道、国会議事堂などの公共的な建造物がある。

さらに、公共的な知識として国公立の図書館あるいはインターネット・システムに蓄えられた知識・情報、国家や自治体を持つ特許情報、憲法や法律のようなルール、社会が歴史的に発達させ人々が共有する文化的システムで、例えば礼儀作法や道徳、宗教的価値と儀礼、それに教育システムなどもある。

われわれ人類のシステムにおいては、一人ひとりの人間は生きるうえで先に述べた私的善を財として表し、所有し、使用する。自分の心と体は自分という価値を担う財である。自分の心と体が生きるために、空気や水や大気、それに道路、社会の言語、知識、法、宗教などの公共物を使う。ところがその場合に必ず、公共財を基礎としているのであつて、この公共財の存在が人間の相互扶助を、時には他者の排除や抹殺を、可能にするのである。

その例を挙げると、民間の会社が窒素肥料を作るために、公共財である大気という気体を使用するならば、一方で人類を益するが、しかしそれと共に工場から排出される有害なガスがもしあるとするなら、それは大気という公共財の中に浸透して工場周辺の人々の生命や健康を害する。公共財

こそは人間の相互作用にプラス、マイナスの「外部効果」(external effects)を生み出させる媒体なのである。この点は後に外部経済・外部不経済のところであらう(第五節)。

なお、善(goods, goodness)とは、「価値(観)」であつて、その価値は物や事によつて具体的に担われ表現されるので、その物や事を「財貨」(goods)といい、英語では同じ語で言い表わす。もちろん、ある財貨がどれだけ善の価値を有するかは、観る者の価値観による。しかも善悪の価値観は、人類が生きるための「都合のよさ」から決めるものである。自然界に人類の心と離れて善悪が存在するのではない。

〈注〉

(6) 人類の社会つまり共同生活の在り様を観察してみると、「私的善の次元が根本であつて、公共的な領域はそのための補完的な位置にあるに過ぎない」とも見えるが、それは実相を観ていない浅い主張といえよう。現実にはむしろ逆なのであつて、私的次元こそが公的次元の海に浮かぶ小島にすぎない。

われわれ人類が住む宇宙も、当然この地球も、人類社会も、その本当の性質からいくと、「ここからここは私の領分」というように私的な空間に完全に区分することはできないのであり、区分つまり境界

づけは仮のもの、不完全なものにすぎないのである。各国の間には国境はあるが、汚染された大気は、いとも簡単に国境線を越えて隣国の空気に侵入するし、情報に至つては瞬時に国境線を越える。こういう性質を筆者は「コモンズの原理」と名づける。これは非ユークリッド幾何学の考えを基にしている。人類の営みとは、そういう仕切りのできぬところに、どうにか仕切りを設け、空間を各人に所属する私的な空間へと、「差し当たり分割しようとする」とあり、その不完全さを自覚してかかるべきなのであ

る。そのように自覚すれば、領土争い、持ち物の奪い合い、盗み、所有欲などから生じる苦しみは随分と少なくなろう。

人類は、私的善の世界こそ実相だという「とらわれの見」にはまり、実相を覗いているつもりでも、虚相しかつかんでおらず、だからこそ時に実相からのしつべ返しを頂くのであろう。この点については、拙著『政治経済学』（増補版）成文堂、一九九一年、第四章、「コモンズとしての社会空間」における非ユークリッド性の原理及び共同体の基礎理論を参照されたい。

(7) 教育哲学の村井実教授（元慶応大学）は、善と善さとを区別する思索を長い間続け、善というような実体は存在しないのであるといわれる。いわく、「ソクラテスの『善さ』（アガトン）」は「単なる名詞形としての『善さ』として考えている」のであり、善という表現を使えば、『善』という何かが、どこかに、どういう仕方で存在するという印象を与えられる。私はそれを避けたいと思っているのである。（村井実『善さ』の復興、東洋館出版社、一九九八年、一一二ページ）

①言葉をどのように使うかは各人の好みであろう

外ではありえない、とはいえる。経済学ではその働きを「使用価値」と名づける。この使用価値という側面なしに、人間の心の側面に善悪評価の働きが生じることは、ありえない。拍手（かしわで）は一方の手のみでは音を発しない。ダイヤモンドは結晶した炭素の素材とその性質（使用価値）なしに宝石ではない。

③われわれは、善と悪とを分別し善を求め悪を嫌う。これは、人間の心の中に働く心理の傾向であって、この心理と無関係に宇宙の事物や対象そのものに善悪の性質が客観的に内在するのではない。台風や梅雨期の風水害、ときおり襲来する地震などは、物的現象としては、それ自体に善悪の性質はなく、人間の立場から善でないという判断を与えているだけである。宇宙自然が悪意をもって人類を痛めつけるといってもない。人工や天然の毒物というものがあるけれども、その毒物自体が悪なのではない。人間の心が、物質を組み合わせてそういう有害物を作らせるか、あるいは見つけて来て毒物として使わせるか、人間の心の内部にそうした善悪の働きがあるのである。しかし、その物質に毒物となる働きがなければ、悪の行為は生まれぬ。

が、人類社会の現実においては人類が善なるものを何か共通の性質を持つ観念として抱き、そして同時に、ほぼ共通にそういう善の観念を帰属させる対象が存在するということは否定できない、と私は考える。つまり、人間の感覚器官と脳を刺激して発動させる性質（正負の使用価値、use value）を備えた対象物を、その善悪の観念と対応させるのである。「意見の対立」はもちろんあり得るが、人類の生存を支える地球を「悪物」とするような善悪判断は、大多数の人類は持ったことがないだろう。時に善悪判断に関して意見の対立があるということ、善悪の判断自体が成り立たないということとは、混同してはならない。

②善悪の区別は、「相対的なもの」で、「とらわれではならない」と発言する識者は少なくない。では、善悪の区別は不要であり不可能であり、意味のないものか。「とらわれる」とはどういうことか。もちろん、善と悪とは、人類（個人及び社会）の心と離れて、人類の外部に客観的に「実体」として固定的に存在するものではない。しかし、その際、物質や情報などの財は、人類に役立つ働きを示すかぎり、善の価値を付与される性質を持つのであり、それ以

④善悪というものについては社会の価値判断と個人のそれとがある。人類社会や文化ごとに定着した価値判断があり、個人のそれは、大部分、その社会の価値基準を人々が内面化して心に抱く価値判断なのである。もちろん、個人の価値判断には「好き嫌い」という人ごとに異なる趣味の部分もあるが、それぞれの時代に共有の価値判断が個人の判断の支えとなっている。

⑤また善悪には人間性の強さ弱さとながる問題もある。各人には、善くないこと悪いこととは知りながら、ややもすれば悪に走るといふ弱さがあり、人類社会から完全に悪の消え去ることは、将来も永久にないかも知れない。それゆえ、多くの宗教ではタブーというものを設けて、それを守らないと困ったことになるぞ、と脅し強制してまで、悪の道に踏み込まないようにさせようとするのである。

⑥さらにもっと不思議なことに、人間の世の中には「禍福あざなえる繩のごとし」という事実がある。ある時に良い結果と思えるものが次の段階の時に悪い事態を生み出したり、逆にある時には悪い結果と思えたことが次の時になると良い結果を生み出すこともある。例えば、人生の元氣盛りのと

き、突如大病にかかり、そのお陰で体のことに気を留めるようになり、その後かえって健康な晩年を送れるようになる。活かし方によっては「失敗は成功の母」でもあるし、逆に「成功は失敗の父」ともなるわけである。

⑦そのうえ、人間の行いには求める善の結果に、好ましくない悪の副作用がしばしば随伴して起きてくるものである。例えば、自動車という文明の利器は人類に莫大な便利さをもたらしたが、その反面、石油依存の生活にわれわれが慣れ親しみ、地球環境破壊や汚染を生み出した。一切のものには、善の性質だけがあるのではなく、常に影の形に添うように

悪の面が伴うことを忘れてはならない。

⑧最後に、善悪の問題には「起きてくる出来事」のいかんでなく、それをわれわれがどのように受け止めていくかという「自覚」の問題がかかわり、この自覚がその後の社会と人生の行く末を左右する。そしてわれわれは、生きる営みの中で、絶えず一歩、どうしても発生する悪の心の側面と結びつく物事を、補修し、償っていかねばならないのである。以上のようないくつかの点を心に入れておかないと、われわれの倫理道徳はおめでたい倫理道徳となってしまうのである。

(三) 善の関係と黄金律の困難

ところで、はるか古代から人類の社会には、黄金律というものが存在して、人々を導いてきていくことが思い起こされる。よく知られた黄金律は、次の二つである。一つは消極的な指針であって、

「汝の欲せざるところを他に施すなかれ」(『論語』など)

というものであり、もう一つは積極的なものであって、

「汝の欲するところを他に施せ」(『聖書』など)

というものである。この二つの黄金律は、人類の歴史を一貫して望ましい人間行為を導く明確な指

針であるとされてきてはいるが、しかしよく考えてみると、まことに不十分な指針であるにすぎないもので、改訂を要するのである。

先ず最初に、「汝の欲せざるところ」であっても、他は欲するかもしれない。あるいは、汝の欲するところを他に施しても、他にとって真に有益であるとは限らないであろう。同じように、汝の欲せざるところであっても、他にとっては欲するところであるかもしれないし、さらに他が欲するところであっても、他にとって真に有益である保障はないであろう。これは決して「屁理屈」を言っているのではない。

もちろん、個人主義と自由主義という前提の下では、「自分にとって何が真の善であるか」をもっともよく判断できる人物は、他人ではなくその本人であるということになっていて、その限りでは各人の善の判断は各人の自由意志に任されている。他人が、「あなたの善の判断はあなたにとって真の善ではない」と、くちばしを入れることは不要である、と。

しかしここには、「医の倫理」(bio-medical ethics)においてしばしば問われるように、患者にとっての真に好ましい治療とは一体何であるのかは、患者が判断するのか、医者が判断するのか、両者の判断をいかに合成するのか、という問題が潜伏する。ゆえに医の倫理の領域では、患者と、医者をはじめ治療する側の人々とのあいだでの「インフォームド・コンセント」(informed consent)、すなわち双方、分かり易く説明を尽くした上での納得に基づく合意の達成が、必要不可欠な手続きとして広く定着するようになった次第である。しかしこれとて、医者と患者という「二方よし」の

関係でしかない。⁽⁸⁾

しかも、後に詳しく述べるが、公共財の存在する場面で、混み入った相互作用の波及関係が発生するところでは、善の相互作用は極めて複雑なシステムを作り上げることになる。

すなわち、自己から出発して自己のプラスの善を目的とする行為が、相手に対しても善をもたらすし、さらに第三者に対しても善をもたらすという場合は、極めて幸運な波及関係なのである。自己から出発して自己にプラスの善をもたらしても、次に相手にはゼロの善をもたらすし、第三者にはプラスの善をもたらすような場合もある。相手にマイナスの善をもたらすし、第三者にはプラスまたはゼロあるいはマイナスの善をもたらす、というような作用連関も十分に在り得る。また、自己にゼロの善をもたらす行為が相手にプラス、ゼロもしくはマイナスの善をもたらすこともある。こうした作用連関を第三者にまで辿るならば、事態はとてつもなく複雑なネットワークとなる。

われわれは、「複雑性」の迷路の入り口に立って、途方に暮れる。どうすればよいだろうか。

〈注〉

(8) インフォームド・コンセント (informed consent) は、「分かり易く十分な説明をもとにする合意」という意味であるが、これは医者と患者との間の治療関係ではもちろん、物の売り買いにおいても、生徒・保護者と学校との間においても、国民や住民と

議員との間でも、株主と会社との間でも、およそ合理的な判断能力を備えた者どうしのあらゆる人間関係に必要とされる。そして、黄金律を実現するためには不可欠な手続きなのである。

ただし問題は、当事者に「判断能力」(compe-

tence) が欠ける場合に、誰が本人の代わりに判断

と合意を行うかという「代理」もしくは「代表」のあり方であり、どうすれば三方善となるかであり、それを達成する方式を作ることとはなかなか容易ではない。医の領域では、世界共通に行われる方式として、当人の能力の欠如は、先ず家族や保護者が補うという方式が、コモンセンスとなっているようである。この点については、トム・ピーチャム/ジェイムズ・チルドレス『生命医学倫理』(成文堂、一九九七年)第三章を参照されたい。

三方善の実現方法については、のちに具体的に考察するが、なぜインフォームド・コンセント——双方が質問と説明を尽くして同意すること——が不可欠であり効果的であるか、ここで考えておこう。これはコンセントにより「安心」を与えることに偉大な効果があるということである。自律の原理に立って「人間は各人自分のことについて自己決定権を有する」という権利の面からのみ考えると、自分で必要な情報を獲得し、自分のことを自分で決め、その責任を自分で負うということは当然であるが、インフォームド・コンセントを行うことで、もつと積極的に、利害関係者の双方が「安心」できるという効

能が大きいのである。

例えば、商品を売る側が、買い手に対して商品について十分に説明し、買う側は安心してその品物を買入れ、説明に従ってその商品に注意深く扱うならば、満足の行く消費ができることになる。また、患者と医者が十分に質問し合い説明し合って納得したうえで治療に取り掛かると、患者は安心して治療を受けるから、疑問点を残し不安のままに受けるより治療効果が高くなり、医者は医者で患者に対して安心して確信して治療を行うから、治療効果が高くなるし、患者も医者とともに奉仕し合い、双方がより高い満足度を得ることになる。

インフォームド・コンセントを単に「権利論の問題」としてだけ理解し、患者は知る権利がある、医者は説明する義務がある、と患者の権利のみで理解するに止まるならば、それは人間の心の関係についてのまことに不十分な理解に過ぎないのであり、「どんな権利論なら妥当なのか」ということを、もう一步掘り下げて、効果論的に考察すべきなのである。

医者と患者の関係では、往々にして患者は、医者に治療してもらう権利があり、医者側に奉仕しても

らう権利がある、とだけ思う人があるかもしれないが、それは大きな誤りなのである。その理由は、患者も医者にも協力する義務があるからであって、患者としては、医者が治療に効果を上げ満足していただくようにと念願して、心から協力する「良い患者」であることが求められるのである。患者は医者から出された薬を自宅に帰って忘れて飲まなかったり、医者から指示された生活上の節制を怠ることが多いのであるが、それでは医者は責任のある治療効果を上げられないし、治療行為から満足も得られない。患者には、医者が治療を行って満足を得ることができ

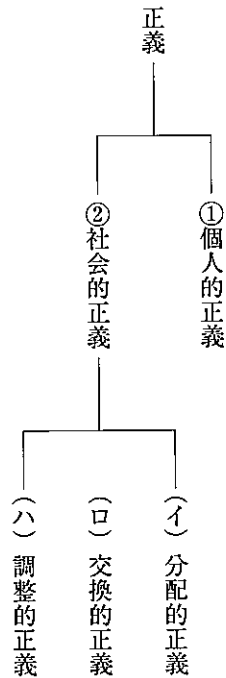
三 善と正義と三方善

(一) 正義の観念と種類

財の作用とのかかわりで善悪関係の複雑さの方面に少々立ち入ったが、三方善には正義の問題が関係してくるので、次にこの点を整理しておく。なぜなら、三方善とは、自己、相手方そして第三者の間での、「善の増加への貢献」と、その貢献に対応する「善の報酬の分配」とに關係し、これこそ古来の正義の問題だからである。それゆえ、ここで色々な正義の観念をまとめよう。

正義とは「正しい状態」(アリストテレス)のことであるが、洋の東西を問わず、古くから存在する人間関係の基準であり、それには次のような種類がある。

図2 正義



① 個人的正義——小さい正義——

これは、古代ギリシアのプラトンによる定義であって、先ず正義とは、個人における精神(魂)の「正しい状態」のことを指す。すなわち、個人の精神(魂)は、理性、感情(欲望)及び意志からなるが、正義は理性がその徳を發揮し、意志を通じて欲望をコントロールしている状態である。言い換えると、これは個人が努力して自己の理性の徳を磨き、その理性の徳にもとづいて意志を働かせ、欲望を節制し、心の平安を実現している状態である。この心の善が実現していることを小さい正義という。それはすなわち、努力して徳を磨き、その努力と磨かれた徳に応じた報酬・結果として、適度の分量の内的な精神善(精神の平安と喜び)が与えられている状態である。健康という身体善も含めてそのように考えることができる。長年節制の徳を蔑ろないがしにしてきた人は、生活習慣病

きるように、治療に協力する義務があるのである。現代倫理で仁恵の原理というものがあるが、それは善の相互提供であり、患者だけが医者から満足を得ることを要求するのは、不公平である。患者も——意志能力がある限り——インフォームド・コンセントをもとに安心して治療に協力し、自分が満足するだけでなく、治療側の満足を増加させることにも協力し、かつ社会の医療費の節約にも役立たなければならぬのである。そうすれば、結局、患者自身の満足の増大になる、というように善の循環が行われることになるのである。

という形で身体善へのマイナスの報酬を頂くことになり、それとともに徐々に脳をも傷めるから精神も病んでくる。その場合にはこの悪循環は自業自得の結果といえよう。

また、おおむねこの努力・徳・精神善に依じて、外的な善つまり物質的な善（所得、地位など）及び非物質的な善（知識、名譽、信賴など）が「私的善」として当人に分配される。結局、各人にはその努力・徳に依じて善の報酬が与えられる。正義とは、この意味で個人における「努力・徳と善の報酬との関係」である。いわば、努力・徳を分母とし、報酬を分子とする分数である。

なお、人類の思想の歴史を振り返ると、宗教、形而上学、哲学、民間の信仰では、神仏、天地自然、宇宙自然があつて、その心とか天命とか法則に依じて各人が努力するのであるが、その程度に依じ、神仏あるいは天がその倉から善（幸福）という報酬を取り出して各人に分かち与える、と考へるのである。これが恵みというものである。その恵みの現れ方が、善因善果、悪因悪果というように、「因果律」の觀念として、人々の心に浸透し定着して来たのであり、だからこそ、その自覚の程度に依じて、われわれは人生において自己の運命に納得するのであろう。

② 社会的正義——個人と個人の間比例関係——

個人は社会の中で、つまり人間関係の中で、自分を位置付け、他人との間に公平性が存在することを願う。これが社会的正義の觀念である。これには次の三つの種類がある。

(イ) 分配の正義

これは個人の努力・徳を分母とし、それに対する善の報酬を分子に置いて分数を作り、その分数

の値が各人において等しいことである。例えば、人間社会には、社会に機会があり、その人に能力があるにもかかわらず、怠けて働かない者もいる。それに対しては、「働かざる者食うべからず」〔聖書〕におけるパウロの言葉」という掟がある。ゆえに、怠け者で働かない人には、自然界と社会はその富（善、所得、名声、信賴）の分け前を与えない。他方、社会の富（善）を増やすことに大いに貢献する者には、それに依じて大きな富（善）の分配を約束する。

この社会的正義の觀念が失われるか傷つけられると、誰も真剣に努力をしなくなり、社会には犯罪が増加し、人間関係の平和と各人の心の安心が失われるのである。会社のような組織でも、自分の努力が正当に認められることがなければ、従業員は働きがい失ってしまう。その場合、個人的正義の觀念が人並みに満たされるかどうか、決定的な役割を演じるのである。

(ロ) 交換の正義

われわれの世の中には、価値の等しいものが交換されるべきであるという觀念がある。これを交換の正義という。労働に対する報酬、学校の授業料から、毎日の買い物、企業同士の売り買い、外国貿易に到るまで、生活のあらゆるところで交換の正義は顔を出す。授業料に応じたよい授業の提供、品物の質と値段との比例などは正義の課題である。

物づくりなしの社会は存在しないが、つくるのにどうしても一〇〇の費用（分母）がかかる品物は費用一〇〇どうしの品物（分子）と交換される傾向があるし、ダイヤモンドやベストセラーの書物やブランド物のように人々が強く欲しいと思う物は高く評価され、それと同じだけ高く評価され

る物（多額の貨幣）としか交換されない。交換の比率（価格）は、提供側の費用と需要側の効用の作用が交わるところに落ちつく（需要供給の理論）。この交換の正義は、善の相互提供による人類社会の共生を安定化させるために、どうしても欠かせない基準である。この基準を満たすべく行動しようとする努力が、お互いの間での信用・信頼を生むのである。

（八）調整的正義

これは主に、犯罪とそれに対する処罰との関係に現れる正義であつて、犯された罪の大きさ（分母）に比例して、社会が取り決めておいた処罰を報酬（分子）として与えるときの正義である。現代社会では、原則として誰が犯罪を行ったかにかかわらず（法の下の平等）、罪と罰のみに注目して、この基準を適用するのであり、この正義を守ることが社会秩序の土台を保證するのである。信賞必罰という言葉は、この正義を迅速厳格に実行することを言い表すものであつて、それが行われなくなると、世の中は麻のように乱れる。よく国家社会の崩壊は内部からといわれるが、その大半のものはこの正義の不徹底による。

以上のような社会的正義は、人間の関係における正義である。多かれ少なかれ社会的正義が実現する所では、不合理な人間差別は無く、各人が個人的正義を信じながら、その上で、社会の人間関係において「自分だけが、特別不利にあるいは有利に扱われるということはない」と納得することができ、その結果どうか社会は秩序を保ち、人々は安心して希望を抱くことができるのである。この社会的正義が破られているとして不満に思う人が増加すれば、それだけ国家社会は不安定となる

のである。人類社会の歴史における激動の大きな原因の一つとして、しばしばこうした正義の欠如が見出されるのである。⁹⁾

〈注〉

（9）正義の観念は色々に定義できるが、以上では人類社会の思想史において最も伝統的で正統的な古代ギリシアのプラトン及びアリストテレスの説を下敷きにして述べているので、プラトン『理想国』『法律』及びアリストテレスの『倫理学』『政治学』を参照されたい。両方とも日本語訳で読める。

プラトン『国家』は、『プラトン全集』岩波書店、第十一卷、一九七五年、『法律』は、全集第十三卷、一九七六年。『政治学』は、『アリストテレス全集』岩波書店、十五卷、一九六九年、『ニコマコス倫理学』は、第十三卷、一九七三年。

（二）正義と三方善のかかわり

三方善は理想であり目的である。現実存在するものというより、実現したい理想的な目的である。もちろんそれは、現実になつた存在しないものというのではなく、多かれ少なかれ実現されつつはあるものの、常に不完全にしか実現されていないものである。そのように理想としての三方善を、以上に見た正義の観念と結び付けて規定すれば、三方善とは、各人において、また各人の間において、おおよそ以上のような種類の正義が、「各人の努力とそれへの報酬としての善の間」に保たれていることをいうのである。もっと正確にいえば、三方善とはつまるところ、自己、相手方、

第三者という三人の者において、各々の個人的正義を実現し、同時にその三人の個人的正義の値がおおむね等しくなっていて、社会的正義が実現している状態である。

その中で、先ず「一方善」とは、個人的正義の実現である。すなわち、自分の努力・徳の分量とそれに対する善の報酬の分量とが比例することであって、より多くの努力と徳に対してはより多くの報酬が実現するという傾向のあることを意味するのである。

例えば、自分の精神の現れである欲望を、同じく精神の働きである理性の徳（精神善）によって浄化し、節制して、健康（という身体善）を実現するとすれば、それは自己自身における正義の実現である。また、仕事に精を出し、工夫を重ねてよい品物を作り、その結果社会からの報酬つまり名声も上がり収入も増えるということは、自分における個人的正義の実現である。さらに、精神の修練として人類の教師から優れた英知を学びとり、その結果、精神善である安心と喜びを高めるのも、個人の人生における正義の実現である。受験生が苦しい勉強を重ね、螢雪の功成つて、晴れて希望する大学に合格するのも、個人的正義の実行であり、私的善の実現であり、一方善の実現である。しかし、受験場で、ある受験生が、友人であるとしても隣の受験生に自分の答案を見せるのは、社会的正義を破る行為であり、違法である。

次に「二方善」とは、自分と相手との間で、正義の程度が等しくなることである。自分と相手との間に、各々の努力・徳の分量に応じて善の報酬が比例的に分配されることである。あるいは、物の売り買いでは、双方の品物の価値に応じて公正に値段がつき、交換が行われ、双方が満足するこ

とである。また犯罪の場合には、各人の罪に応じて処罰が与えられることであり、各処罰の間に不公平がないことである。

この二方善では、例えば品物を製造する側とそれを購入する側との間のように、双方が競争の関係にあるときには、「交渉」というものが行われる。交渉とは、お互いが自己にとつての正義と考える比率を提示し合うのであり、その競争から、各人の正義の間に折り合いをつけることである。¹⁰世界中では、正札取引はむしろ例外であつて、私が東南アジア各国の開発調査に従事していた一九七〇〜八〇年代には、市場での掛け合いではおよそ半値までなら値切つてもよい、と教えられたものである。売り買いの交渉はゲームそのものである。

しかし、交渉はいつも平和的であるとは限らない。話し合いで折り合いがつかぬのが望ましいが、実力に訴えて決着をつけることも覚悟しなければならない。国際的な経済封鎖などの手段による「制裁」とか、あるいは熱い「戦争」はそのようなケースである。

さらに、「三方善」は、二方善よりも利害関係者が増えて、第三者を視野に加えるときの正義である。この場合でも、善の増加への各人の貢献と善の配分とが比例するという原則は、二方善の場合と同じである。つまり、三者がかかわる善（その担い手である財）について、各人つまり自己、相手方、第三者が、それぞれその善の増加にどのような貢献をしたかに応じて、その善の分配を行うということである。ただしここには、後に述べるように、公共善とその担い手である公共財が関係してくるので、二方善のときより事態がいつそう複雑になることは避けられない。

(10) 現代社会では二方善の関係は明示的にか暗黙にか、

「契約」という手続きによって正確に行われるのを通例とする。そこでは、当事者双方が納得のうえで善の配分の結果を認め合うので、調和は得やすい。残るは契約の履行の問題だけであり、信用とか信頼という精神善が当事者の間に共有されることが、決め手となる。それが欠けると契約不履行が生じ、契約を履行させるための費用が高む。人類社会における道徳とか倫理というものの役割は、人間行動の予測可能性と確実性を高めることにあり、無用な「取引費用」を増やさないということにも見いだされるのである。

ところで、人類はどの文明においても多かれ少なかれ、以上のような正義の観念を発展させて来たが、正義の実現には次のような宿題が今でも残っている。

① 人生の出发点においてスタートの平等が保障されないという事実

われわれは、生まれにおいて身体障害者であったり、遺伝的な持病もちであったりするが、逆に心身の上で天分として特別有力な資質や能力が恵まれている人があり、知能の格差が大学入試の結果の違い

を生み出すことも否定できまい。これを個人善における初期条件の格差と呼ぼう。このような初期格差は、個人の努力の大小が生み出す結果ではない。われわれ個人個人の「出生後の努力と責任」を超えて、何らかの原因や作用が働いたのであろう。この問題には、従来の正義論をもってしては答えることはできない。個人の人生の状態は、百パーセント生後の個人の努力のみによって決まる結果である、と計算することは科学的にいつて無理である。

しかし、その場合でも、各人は、与えられた出生のときの心身の条件を前提として——社会による支援は正しく受け容れつつ——意思能力 (competence) のある限りは自分のできることを最大の努力を払って行い、自己の正義をその範囲で実現する。

初期条件の相違は、各人の努力と成長へのきつかけとなり、相当程度まで、このような社会的支援と故人の努力でもって乗り越えることができる。初期条件の格差を受け容れつつ、人生においてそれを乗り越える成果を挙げた人は歴史上少なくない。

② 社会の条件により各人が有利不利の扱いを受けるといふ事実

「ヴェニス商人」はいろいろな意味を含む作品であるが、「契約書とおり血を一滴も出さないうで肉だけ正確に切り取る」ということが不可能であると、裁判官が述べる。実は物語の真意は、契約文書の不適切さを指摘することにはない、むしろ人間世界の物事では、あまりの正確さ厳格さを要求しても実行不可能なことがある、物事の処理にはあいまいさを許容する「寛大さ」が必要である、ということを前提にせよ、と主張しているのである。

歴史上多くの社会で行われたのだが、身分格差を認めた社会制度の存在する場合には、努力が公平に認められないことがある。各人の人生における努力が他人と同じような機会を初めから保障されないか、仮に保障されても身分上や職業上の差別的制度(文化も含むマイナスの公共財)が存在する場合である。古代社会から、人類は、国民は、このような格差、差別の解消に努力を払ってきたが、いままおその残存効果は消えてはいないので、息むことなく改善に努めるべきである。「不条理な苦痛」を減らすための、適切な範囲での社会制度の改善は人類共同の永遠的悲願である。この点、市井三郎『歴史の進歩とはなにか』(岩波書店、一九七一年)は、苦しみというものを、自分の責任によって受ける苦痛と、自分の責任によらない「不条理な苦痛」とに分け、この不条理な苦痛を減らすことが歴史の「進歩」を測る尺度になると主張する。一つの見識であろう。

③ 正義にこだわりすぎるとかえって苦しみや争いが消えないという事実

実は、人類の行うことは機械と異なり、どれだけ努力や貢献を行ったかについて、厳格な測定も正確な報酬計算も不可能である。シェイクスピアの

④ 正義の弾力性と受け取り方
にもかかわらず、正義は、あるべき基準として、理想として、各人の出生後の生きる努力とその結果についての標準として、善因善果、悪因悪果という善悪の標準として、やはり認めなくてはならない。善悪の標準として、やはり認めなくてはならない。出生時の条件の不均等、人類社会の仕組みに潜む歪み、人間行為の正確な測定の不可能性、といった問題を少しずつ解決しながら、正義は性急にこだわらず、適度にもちいれればよいのである。自然界や物質・情報を機械として扱う場合には別だが、人類世界の物事についての人間行為のモノサシには、精確さにおいて万能のものは存在せず、道に応じて適宜に使うべきなのである。

正義の観念は必要不可欠ではあるが、それにこだわりすぎると、正義の基準は実行不可能となり、不可能なものを精確に実行しようとすることから、かえって苦しみと争いが発生するのである。ここに正義のパラドックスがある。正義のモノサシは「おおよその基準」にすぎないものである。人類はこう悟るべきなのではないか。確かな機械ならぬ不確かな人間には、どうしても許しとか寛大とか寛容という精神が求められるゆえんである。

要するに、われわれは、人間のいのちや生活を危なくするので厳密に精確さを必要とするような、機械とか物質、契約の履行、情報の処理のようなものを扱うときは別として、お互いゆとりを持ち、多少

(三) 一方善からの出発

われわれの目指すところは正義を理想とする「善の相互提供」である。とはいえ、われわれは一つの真実を知らねばならぬ。すなわち、人類社会の個々のメンバーたるわれわれは、現実には何よりも自己の私的善を追求するという意味で「利己的な存在」であり、先ず自分の私的善を高めることがその日々の生活と仕事の第一のねらいなのだということである。したがって、個々人も、会社のような組織も、さらに国家のようなもつと大きな団体組織も、それぞれ私益、社益、国益といっ

の加減を認めるということである。

また、もつと重大なことは、一切自分に降りかかる条件や出来事を、すべて究極的には自分にとって善となり利益になるものと受け止め、現在の任務に希望と使命感をもって打ち込み、そのように確信して明日からの一步を踏み出すことである。このような思考は、与えられた条件や境遇を変える可能性を増やし、過去に囚われず、可能性を未来へと広げて正義を実現する方法である。これこそ未来を拓く積極思考というものである。このように、正義という善のモノサシも、自分の考えから離れて存在するものではないのであり、考え方次第でより良く実現するのである。

た形で、私的善を目的として設定し探求する。われわれも地獄の餓鬼たちも、自分の口でなく相手の口へと食べ物を選ぶのは、何より自分の口に食いたいからだという面がある。

このような利己的な一方善の行為原則は、考えてみれば至極当然のことであって、自分はこの広大な宇宙の一部であり、いうならば「自分の心身は宇宙からの預かり物」であり、それゆえ、自分の心身、いのちは、他人の手を借りることなく自分自身で「始末」しなければならぬわけである。重病になったときでもない限り、自分の食べ物は自分自身の手で調達し、自分の口に運び、自分の口で咀嚼し、自分の体内の消化器で栄養とエネルギーに変えるほかない。そして自分のお尻は自分で拭かねばならない。これらのことを、他人はやってくれない。介護の場合以外、他人のお尻を拭いてまわるほど、暇で奇特な人など、この世に誰もいない。¹¹⁾

この「自己責任」は、社会全体の相互作用のコストを切り下げるための、最も有効な方法なのである。もしも、自分のたばこの吸い殻、排泄物、家庭ゴミなどを、一端そこら中に撒き散らし、それからふたたびそれを掃除してまわるといふやり方をするならば、社会全体としてきれいな生活を維持するためのコストを、限りなく増大させることになる。これはのちに述べるが、物理学にいう「エントロピー増大の法則」が人間のまずい行動を通じて現れてくる局面である。

もちろん、人間社会はお互い余裕のある限り、生きることに於いて「能力」(competency)が不足する同朋を見ると、すすんで相互扶助を実行し、あるいは自分自身がそのように不足する立場に置かれると、扶助を希望するのが自然の人情というものだと思う。海水浴をしていて痙攣がきて溺

れそうになつてゐる人、生まれつき重度の身体障害で自己のいのちの維持が自力では不可能な人、それから交通事故や不慮の災害によって生命が危うくなつてゐる人、老齢化し老衰極度に達してゐる人、痴呆症などにかかり自己自身の生命を自力で維持できない状態にある人、まだ幼くて一人での身の回りの始末をできない幼児たち、社会の文化に浸み込んでいる差別意識のため人間差別に苦しんでいる人……。これらの人々は手助けすべき——されるべき——存在である。

このような時の手助けは人間の自然の愛情の表れなのであつて、競争の中での各人の自己責任原則にこだわつて放置しておいてはならず、お互いに自己責任原則を乗り越えて行動しなければならぬ。これは善の一方的な提供の型である。——ただし助けようとする人は余力を持たぬと一緒に溺れるので、普段から自分の力をつけておかねばならない。他助の元は自助にある。「天は自ら助くる者を助く」というが、さらに自らを助くる者は他をも助ける。

しかも、実はその扶助の行為は、よく「無償の愛」といわれるが、決して「無償」ではなく、行為してみればわかるように、行為する人自身が深い喜びという報償をその行為から与えられるのである。これは求めずしておのずから与えられる喜びであり、人間の相互関係においては、扶助あるいは愛は必ず形を変えて報われるようになってゐるようである。¹²⁾

〔注〕

(11) 世には古くから「トイレ掃除」をして回られる

人々や団体が存在するが、それは「自己の修養」のためにすすんで行うのであつて、究極的には「自己利益」をもたらずと信ずるところから発する——実行中は無心——のである。ただし、ここには慎重に考察すべき重大な真実がある。それが、単なる自己の満足のための自己利益行為ではなく、その行為を通じて「社会の他の人々の精神にプラスの効果が生じる」という「心の善循環」が造り出されていることである。ゆえにそれは、「神聖な意味」を含み、決して単なる自己満足の行為ではないのである。

鍵山秀三郎さんといえば、「イエローハット」という自動車用品販売会社の創業者であり、長年にわたるトイレ掃除の実践において有名であつて、全国にその賛同者が多いことは周知の通りである。

鍵山さんは、「掃除の効果」を、次のように述べておられる。

- (1) 掃除を徹底して続けると、やがて「自分の心を磨くこと」につながる。
- (2) 大ざっぱであつた人が、細かいところに「気づ

く」性格に変わっていく。

(3) それとともに「謙虚」になつていく。

(4) 物事に「感動」を覚える人間になつていく。

(5) 段々と「感謝」の心がわいてくる。

人は多く逆の順序を考えているものであつて、幸せになつたら感謝の心がわくと思つてゐるけれども、「感謝の心を持つから幸せになる」のです、と。

〔鍵山秀三郎「凡事徹底が人生を変える」

モラロジー研究所、二〇〇一年〕

正直に告白すれば、私は、「たかがトイレ掃除」ととき、一体それが経営にどのようにかかわるのか、役立つのか、社員に暗黙の強制はないのか」など、かつては少々、疑問に感じていたものだが、近年やつと一つの意味理解に達した。すなわち、私の理解は、次のとおりである。

① 地球環境問題の解決には、家庭排水をはじめとして、人間自身の吐き出す廃棄物による汚染を処理することが究極の課題である。

② トイレというところは、まして自分のうちのトイレでなく、公衆トイレは、どこの他人が使う

か分かりもしないもので、人間界での公共的な「汚れの極致」の一つであり、その場所を掃除するということは、愛の実践の極致の一つである。

③ 私たちは、自分自身の下の排泄物でも、触りたくないものだし、まして赤の他人たちが汚したトイレをきれいにするなどということは、なかなか実行する気になれないものだが、その心の峠を乗り越えることが、自分の人間としての深みを作るのである。昨日まで我儘放題で育った娘さんが、子を産んで母親になった途端、いそいそとわが子のおしめの世話をしようになるのは、本能の助けもあるが、そこに人間性の偉大なる飛躍が起こるのである。

徹底し継続すれば、平凡なことも平凡でなくなるのであろう。私ごととき大学教員は、自分一人の口を漱ぐのさえままならないのに、経営者は多くの従業員とその家族の生活を支える大きな力を有する。その意味で、人格の力が違うのであろう。

(12) 廣池千九郎は、昭和初年頃、伊勢地方に存在する「させていただく」という言葉使用とその道徳的含意について、次のような興味深い記述を示している。

最高道徳においては自己の犠牲的行為をもって他人を助くるものとなさずして自己を助くるものとなす

われわれがわれわれの過去の贖罪のためとして真の慈悲心になって、最高道徳的に一切の事に対して努力するという理由よりして、最高道徳においては何事をなすにも、これをもって他人のため、国家のため、もしくは社会のために働くなどといわないのであります。一意自己の過去における、神に対し、人に対して無意識的もしくは有意識的に犯せるところの罪の贖いと、更に自己の将来の品性完成のためとに、犠牲を払うのであるという精神作用によって、最高道徳的努力をするのであります。したがって最高道徳では、一切の道徳的行為を、「他人のためにこれをする」といわずして、「自己のためにこれをする」というのですから、「してやる」といわずに「させてください」とか「させていただく」とかというのです（天祖御鎮座の伊勢地方には今もかかる古語が存しております）。

かかる精神作用が最高道徳の実行の原因を成しておりますから、ひとたび最高道徳を体得しましたな

らば、その心はおのずから謙讓優和となり、かくてまず自身が救済され、更にその周囲の人々も漸次に救済されるに至るのであります。

(新版『道徳科学の論文』⑦二二八―二二九ページ)

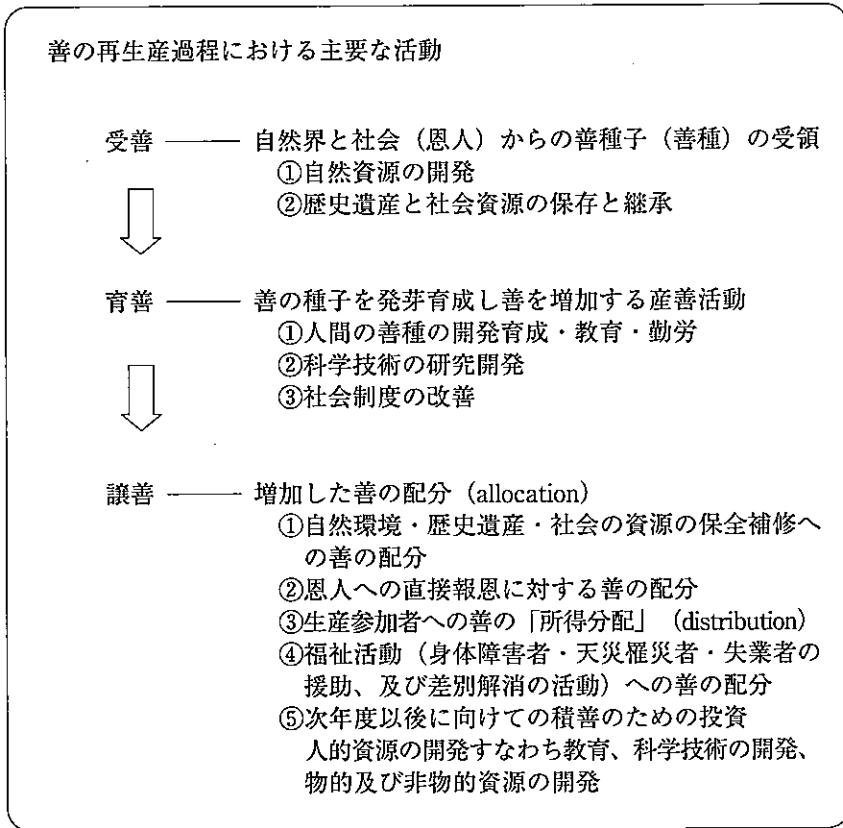
なお、ここに「最高道徳」というのは、世界の諸聖人すなわちソクラテス、孔子、釈迦、イエス、それに日本では古典における天照大神の道徳に共通する高次元の道徳であり、人類の自己保存の本能から発達した「普通道徳」とは本質を異にするものである。

一方善からの出発ということは、これを言い換えると、カトリックの社会哲学で強調されてきた「補完性の原理」の実行といってもよい。つまり、人類社会では「神の似姿」としての個人の「人格」を尊重し、人は先ず個人にできることは自分自身で行い、個人でできないことを家族で補い合い、家族でできないことを地域社会、学校、会社など家族以外の組織や共同体で補い、それができないことは国家が行う。国家はその意味で包括的な共同体なのである。ただし、個人にできることを学校とか会社、国家など上位の共同体が横取りして行つてはならない。また、それぞれの社会の段階ごとに、そのメンバーの

間に少数の共通価値（公共善）が存在し、メンバーが共有する。家族には祖先の願いと家の文化という家族の共通価値があり、学校にも、会社にも、国家にも、それぞれに共通価値がある。国家の場合は国歌や国旗、憲法に示される共有の共通価値がある。

この「補完性の原理」(subsidiarity principle; Subsidiaritätsprinzip) の現代的な重要性については Amiral Eizion, *The New Golden Rule*, Basic Books, 1996. (アミタイ・エチオーニ『新しい黄金律』麗澤大学出版会、二〇〇一年) の訳者解説を参照。もともとこの補完性の原理は、欧米社会を長らくリードして来ているカトリックの「キリスト教神学」における社会哲学の三原理の一つであり、その三原理とは「連帯性の原理」(the principle of solidarity)、「公益性の原理」(the principle of public goodness)、「補完(助)性の原理」(the principle of subsidiarity) のことである。補完(助)性の原理が最初にはつきりと述べられたのは、教皇レオ十三世の回勅『レールム・ノヴァルム』であるとされる。三原理の簡潔な説明はヨーゼフ・ヘフナー『社会・経済倫理』(同文館、一九七六年)、原本の日本語訳は『教会の社会教書』(中央出版社、一九九一年)を参照。

図3 善の再生産過程



四 善の再生産理論

（一） 受善

さて、善の概念と正義——善分配の正しい状態——を確認し終えたので、われわれには正義を標準として、人類の生命活動を「善の再生産過程」として眺めることが可能となった。それは以下のように三段階のプロセスからなる。

まず第一は「受善」である。われわれは、宇宙自然とその中の地球から、善の種子を無償で頂いている。これを「受善」と名づけよう。直接大地の上に立ち、重力の働きを受け取り、太陽光線を浴び、空気を呼吸するが、大地の働きも、重力も、太陽光線も、空気も、それらはすべてが無償なのである。太陽は陽光の代金を請求しないし、地球は空気代を収金しない。

また、人類の生存のために必要な財貨を獲得する最初の活動は自然界に働きかける農業、林業、漁業、鉱業などの第一次産業であるが、それは、すべて原価ゼロの自然の恵み——災害もやってくる——に依存するものであって、われわれは人類全体としても、国家としても、個人としても、宇宙と地球の物質的、情動的な善を頂いている。

こうした善の無償の恵みを、われわれの祖先は「恩」あるいは「恵み」と呼び慣わしてきた。この恩はさらに代々の先人によって、歴史の遺産という形で、人類の新しい世代のために無償で譲り渡されてきているものである。

例えば、言葉や社会制度といったものは、先人が試行錯誤の中で築き上げてきた善であり財であつて、子孫の世代に無償で与えられている。幼児が言葉を覚えるにあたつて、言葉の特許料を誰か先人に支払うということは、これまで人類社会に行われたことはない。無償の善の中には科学技術があり、宗教的、哲学的な叡智もあるが、これらはすべて無償で先人から譲られた善であり財なのである。——個々の発明のうちには特許料が認められるけれども、それは開発費回収と開発努力への見返りであつて、一定期間だけの特権でしかない。

われわれ人類や国民や子孫は、これらの善の種子(善種)を感謝して拝領するのである。この感謝が「感恩」「謝恩」というものである。¹³⁾

〈注〉

(13) 善種子(善種)を頂く、受ける、という発想は、

すべてのものを人間が人力で創造するという傲慢かつ非科学的な観念を捨てた、事実に基づく冷静で謙虚な見方であり、科学的な立場である。善種子の受け取りには、①個人は心身に対して遺伝子と家庭教育を親祖先から受け取り、②社会からは歴史の先人が積み重ねた(積善した)成果を文明と文化として受領する、③自然界からは地球環境の利用を許して頂く、という三つの局面が同時に重なって進行する

わけである。

仏教は頂いた善を「四恩」とし、父母の恩、国王の恩、衆生の恩、そして三宝(仏法僧)の恩に着眼する。「頂くこと」及び「頂いたもの」を恩(恵み)というのであるが、キリスト教でも、神の恩恵(Grace)といつて、このような受善としての「恩の思想」は見いだされる。

ともかく、このように「善種子を受け継ぐ」という観点は、人類の歴史を理解するうえで、不可欠の

ものである。歴史とは、成功(積善)も失敗(積不善)も併せて、人類による善と悪との連続的積分に

ほかならないのである。

(二) 育善

次の段階は、育善である。つまり、無償で頂いた善の種子を、愛や慈悲の精神でもつて発芽させ、立派に育てあげることである。これを「化育」ともいう。歴史上、人類の生命活動は、先人の念願に応えて、こうした先人からの善の無償の恵みすなわち恩に対して、報いていくことであるが、報いることの第二段階がこの育善なのである。

育善には、善を増加させる積極的な側面と、善の破壊や損傷を補修し、あるいは抑圧を除去するという消極的な側面がある。こうした善の破壊、損傷、抑圧は、「善の増加」というプラスの活動の反対に、「善の減少」というマイナスの活動なのであつて、善をマイナスにするその種の活動を人類は「罪」(sin, crime)と呼び、社会からそのような罪をなくそうと努力してきた。

キリスト教や仏教のある宗派などでは、あるいは人間はすべて「原罪」を負っていると教え、あるいは「罪責深重」と主張する。生きるという活動が必然的に善の消費や減少を伴う外なものなのだ、という人間観、生命観がここには秘められているといえよう。だから、こうした人間観に立てば、すべての生命活動に先立って、贖罪あるいは罪払いということが前提となることになる。

この観点は、現在の地球環境の破壊の現実に向直して、環境破壊をもたらさない生命活動はどこ

にもないことを教える。いふなれば「人類はそれとは知らずに、自分たちが乗り合わせている宇宙船地球号という船の底や壁を噛じって穴を空け、沈没させようとして一生懸命努力しているに等しい」のである。これは科学的に否定できない事実である。¹⁴⁾

〔注〕

(14) 善悪の観念の根柢を科学的に考えて行くと、エントロピーの理論に出合う。物理学では「エントロピー」という概念を発展させているが、これは計量できる実体である。物理で「エントロピー」とは、拡散とか汚れのモノサシであって、宇宙の中で物が働く増大し、物の働きが失われてなくなることを表わすものである。エントロピー増大とは、物質エネルギーが持っている「拡散する能力」が失われることを指す。今それを援用すれば、「善種」はさしづめ「低いエントロピー」のことであって、受善はその受け取りを意味する。優れた哲学と科学の結論とは方向性が一致するものなのであろうか。

人類は、宇宙自然と社会とから成る「世界」(宇宙自然界)の内に住む存在であり、その宇宙とは、たえず物が静止——働きの可能性がゼロの状態——に向けて進行しつつあるという「エントロピー増大

としての「種子」であり「善性」であって、エントロピー減少のためのノウハウであるともいえる。反対に悪とは、せっかくのエントロピー減少を帳消しにするような相(存在の形と運動)であるというわけである。それゆえ、人類の文化とは、善を求め悪を避けようとするときに活用できるノウハウ(叡智と知識)の体系であり、歴史とは時間の経過と共に行われている、エントロピー減少に向けての全人類の努力の積み重ねなのである。

そのようなノウハウを解明するのが学問であって、古来、宗教と哲学が、そして近代になると科学がその責に応え、科学の中でも最初は物理学が、そして近時は生物学、生命科学が、情報科学と結びついて、重要な任務を負うに到っているわけである。

この間の事情の歴史的な推移は、高瀬浄「近代産業文明の構造と要容——脱近代のすすめ——」(見洋書房、二〇〇〇年)の総合的な考察が有益である。著者は、こう述べる。「十九世紀文明が『物質とエネルギー』の物質代謝過程によって特徴づけられるとすれば、二十世紀、なかんずく第二次世界大戦後の文明は、『物質と情報』の代謝過程によって特徴づ

の法則」の支配する空間である。このことは、人類にとつては宿命であるということになる。その法則の下で人類は、地球というシステムにおいて、極めて小さい局所的な範囲で、エントロピーを「減少」させ、生命活動を行っているのであって、このエントロピー減少の相を、われわれ人類はプラスのものとして感じ、プラスの意味を込めて善と名づけているわけである。エントロピー論と地球生命系、資源、汚染との関係については、物理学の厳密な説明は植田敦『資源物理学入門』(NHKブックス、一九八二年)、人間の経済活動とのかかわりは玉野井芳郎『エコノミーとエコロジー』(みすず書房、一九七八年)、及び永安幸正『経済学のコスモロジー』(新評論、一九九一年)を参照。

エントロピー理論からすれば、善の種子とは、局的にエントロピー減少を可能にするような潜勢力けられ、さらには「情報と生命」の代謝過程を特徴とする生命体の探求に向かっているように思われる。(一六二—一六三ページ)生命系の探求も超ミクロの生命と地球全体のマクロな地球エコロジーともいえるものとを統合する展開が進行し、地球惑星のトータルな把握を目指す「ゲオコスモロジー」が展望されるという。(第十章)

二十世紀は近代文明の頂点であり、その近代文明の「超克」とか「かげり」が叫ばれたのもまた二十世紀であったが、その内実については、科学の立場からというよりも哲学的、文学的な立場からの発言が多かった。しかし、本書に説くように、文明のあらゆる点において、近代からの脱却は、何より「科学技術」の内容に変化が見られ、物理学から生命科学へのシフトが起こった。こまかくいえば地球科学と、マクロのエコロジー、それに情報科学と連動してミクロの生命科学の発展が進み、人類の価値観も自然から離れる方向を善しとしたものから、地球的生態系へと「文明を埋めもどす」発展——人間の再定位つまり善の生産様式の再構築——が興ってきているのである。

(三) 讓善

これは善の欠損を補修し、増加した善を他に譲り、人類誰もがその善によって生命活動を盛んにすることである。だからこそ、増加した善を誰かが独り占めにすることを人類は「利己主義」(エゴイズム)、「自己中心主義」、あるいは「独占主義」といつて非難し、排除せんとしてきた。なお、二宮尊徳が讓る活動を「推讓」と名づけ、勤・儉・讓の体系の中に位置づけて重視したことは周知のとおりである。

この讓善では、何よりも先ず第一に、宇宙自然と地球環境への負担あるいは危害を補修する活動へと、増加した善を充当する「環境保全の投資」がくる。嘯りとして薄くなった宇宙船地球号の船底や壁面を補修し、ほころびを目張りすることなしに、他のどんな行為を行っても、人類の永続という究極価値は保障せられない。併せて、歴史遺産と社会資源の保全や補修に対して善を配分する活動も必要である。

讓善の第二は、「報恩」であつて、恩人の労苦に応えることである。恩人とは、われわれに善の種子を恵み、自然と地球とから善の種子を運び、歴史の流れの中で代々善を受け継いできてくださった人々である。

恩人のうち、故人に対してはその魂に向かって感謝し、「その善の恵みをわれわれが真に活かすようにいたします」ということを誓うのである。これが人類の先人たちやわれわれの先祖に対する祈りと祭りの本質である。

恩人のうち、次に生存者に対しては、「その方々が天寿をまっとうされる大往生の日まで気力体力を保たれ、人類の一員として善の増加に努められますように」と願つて、篤く孝養を尽くし、「安心」の日々を送つていただくことである。これが昔からいわれる「孝行」というものの本質であり、「孝は百行の本」すなわちあらゆる行為の原型とされるのであるが、その真理であるゆえんはここにある。¹⁵このような報恩は、のちに述べるように、会社などの組織においても行われる。

第三は、善の生産に参加した人々へのいわゆる所得の分配である。この所得分配については、注意すべき点がある。つまり、第一に述べた環境保全のための投資と報恩とを差し引いて後、人類の間で増加した善の「分配」が行われるのであり、この分配せられた善は、人々がつましやかに「消費」し、あるいは利用して、自らのいのちの活動を支えるのに使つてよいのである。

第四は、「福祉活動」への善の充当である。福祉の基本は、社会の「自由競争」に参画できない人々、言い換えると様々な能力 (competency) の欠如のため自助に差し障りのある人々への相互扶助にある。これを欠く社会は正義に悖るのである。

そして、讓善の第五として、次年度以降に向けての「投資」がくる。その年の善の実りをすべて消費し尽くすならば、それは「手から口へ」(hand to mouth) すなわちその日暮らしということになって、人類の生命活動の向上発展はありえないことになる。その意味で、善に対する生産的な投資は、人類が世代を重ねて生き続け発展するつまり「持続的発展」のための前提である。

以上は善の概念を用い、人類の生命活動を幾分経済学的にとらえて、構築したものである。すな

わち「善の再生産の理論」である。こうした受善—育善—讓善の三段階の活動を行うことが、先人から頂いた善の無償の恵みであるところの恩（徳）に対して報いること、すなわち「報恩」（報徳）なのである。古来優れた宗教や哲学には、あるいは人生論には、すべてこうした恩と報恩の必要性和その要点を説かないものは一つもないのである。

〔注〕

(15) ところで「親孝行」は、現在では廃れつつある古い家族道徳であるかのように見られるが、三方善の実現という観点から「家族集団の範囲における報恩の在り方」として考えると、親孝行は重大な効果を生み出す倫理であり道徳であることが分かる。それは先にもインフォームド・コンセントのところでも触れたように、「安心」の効果と深いつながりが見いだせるのである。

三方善における「安心」というものの重要性について、私的な体験ではあるが、著者は長い間、誤解していたことを、ここに記して反省の契機としたい。すなわち、私は高校・大学時代よりこの方、親孝行というものを真剣に考え、それなりに掘り下げて了解し、実行して来たつもりであったが、しかし重大

な点を見落としていた。

親孝行といえは、なにより先ず、「親を尊敬すること」、「親を愛すること」、「親の言うことをよく聞いて順うこと」というように理解される。親に対する尊敬と愛とは誰でも行うが、親の言うことを聴く、つまり親の言うことに従うということとなれば、なかなか実行が難しい。子供は、何物にも制約されずに自分の希望を遂げたい年頃だから、親の言うことといえどもそれに従うことは、自分への制約として嫌う傾向がある。いつの時代にも親と子の対立葛藤が家族の中に発生するゆえんである。

そこで私は、次に高等学校の頃から、真の親孝行ということとは、親の言うことを聞くという形式よりも、「親祖先から頂いた能力を伸ばしきることであ

る」と考えて努力し、それなりに成功を収めて来たし、親もその成功を喜んでくれたものである。しかしながら、その後の四十年以上に及ぶ長い年月の間に、親に喜びを与えることは少しはできたが、大事なことを看過して来たのである。それはほかでもない、親に「安心」を与えることを軽視して来たという点である。そのことにハッと気がついたのは、ようやく還暦の年を迎える頃であった。すなわち、親に対するインフォームド・コンセント、つまり報告・連絡・相談が、私の場合、大いに不足していた気がついた。私の真剣な努力とその結果については、親は喜んでくれたであろうが、「安心」していただくという点では、まことに不十分であったのである。私は何を次にやろうとしているか、大事なことを報告し、連絡し、相談することを十分に実行しなかつたのである。

少々の喜びはあつても、安心がなく、たえず不安が心をよぎると、老境に入った両親には、その残りのエネルギーを全力投球して「人類社会の善の増産」に努めることに、マイナスの作用を及ぼすわけである。両親に十分に安心をしながら、身を終わるまで善の増産に努め、大往生をしていただく。そのよう

に、子としては親に安心をしていただくように配慮することが、いつの時代にも通じる親孝行の要である。安心を与え合い、心の善を提供することを人間関係の根本とするならば、国際関係まで含めて、万事がよい結果となるのである。「安心を得ても頂く」という真の孝は、「孝は百行の本」という古来の言葉の意味の実現であり、それがインフォームド・コンセントの実行の「安心効果」なのである。

ところで、恩の観念は徳の観念と、報恩の観念は報徳の観念と、それぞれ対応し平行する関係にある。恩と報恩については本文に述べたとおりであるが、他方の徳と報徳ということについては、二宮尊徳の実践と哲学が卓越し、その道歌に次のようなものがある。

天地の神と皇との恵みにて

世をやすくふる徳に報えや

天地と君と親とのめぐみにて

身をやすらはん徳を報えや

まけば生え植うれば育つ天地の

あはれ恵みのかぎりなき世ぞ

百草の根も木も枝も花も実も

種よりいでてたねとなるまで

父母もその父母もわが身なり

われを愛せよ我を敬せよ

勤むべき業も思はず食ひのみ

遊びすこせばくるしかるらん

〔佐々井信太郎「二宮先生道歌集」一円融合会、改版、

一九九三年〕

二宮尊徳における徳と報徳の思想は、一つの抜きがたい見解の「独善性」——それを主張する人々自身のそれ——を逆照射するものであると思う。「資本主義は唯一、西欧プロテスタントの合理的信仰からのみ発生した」、それゆえそれ以外の系譜にある日本資本主義などは不合理なものを多く含み、乗り越えられるべきだ、という独善がそれである。一切のものを「欧米なるもの」——の現実とは違う——によって測定し、それとの距離によって価値評価し、「正常」か「異常」かを判定して安心する。「欧米なるもの」がどこまで現実なのかは問わない。それは書物に描かれている像である。

しかし、かつて搾取に突進し帝国主義に走り、今日投機に心を奪われ、環境破壊に盲進する程度の低

いアメリカ型資本主義の現実が、なに故に唯一肯定され推奨されるべき善き「合理主義」のシステムなのであるのか。単純な「近代欧米モノサシ主義」はまだ生きているが、もういい加減乗り越えられるべきモノサシ主義ではないだろうか。欧米自体も迷走しているのだからである。もちろん、貴はプロテスタントの信仰そのものにあるのではなく、資本主義の精神と現実にある。生まれた幼児は、親祖先から遺伝子と教育を授かるが、すべてその後の人生がそれによって決まるとはいえず、ある程度自由に、生まれたものの独自の育ち方が現れるのである。

オリジナルな欧米モノサシ主義の主張はマックス・ヴェーバーの所説の日本での受け取り方に由来するのだが、日本ではヴェーバーに依拠しつつ、大塚久雄氏（当時、東京大学教授）は、プロテスタント、なかでもピューリタニズムにつき、次のように説明されていた。

「ピューリタニズムの場合には、生来の人間は原罪によって被造物的に墮落したものだから、厳しい自己訓練によって……すべてを神の大義のために捧げる、そうした方向づけをできるだけ生活に与えようとす」（大塚久雄『社会科学の方法』岩波書店、

一九六六年、一六八ページ）のである。「現世は完全に被造物的に墮落したものだ」とあり、「やがて終わるべき旅路」に過ぎないものだと考え、現世を完全に拒否する。そう考えたが故に「それを根本的に変革してしまふ」という「大変な精神的エネルギーを生み出す」ことになった（一七六ページ）。「隣人愛のための自己訓練としての禁欲生活の中から、現世全体を合理的に変革していこうとする非常に積極的な性格が生まれてきた。」（一六八ページ）「ピューリタニズムは、現世において神の栄光をあげ、隣人愛を実現する手段として営利活動を是認したばかりでなく、その目的に合致するかぎりでは、かえってそれに高い倫理的な価値をあたえ、それを使命として遂行することを命じたのです。」（一八〇ページ）

こうして特異な合理化と隣人愛の徹底的な実行は個人の人生と社会と歴史を大変革したといわれるのである。そこで、儒教、道教、仏教、（そしておそらく日本神道）などでは、そうしなかったという結論になるのである。しかし問題は、何が「合理」であり、「隣人愛」であるのか、そのようにして生まれた資本主義が、弱肉強食式の競争でなく三方善の競争を実現し、真に人間を幸せにする経済制度であったか、どうかなのである。他方、二十世紀における壮大な実験——マルクス主義的な社会主義のそれ——はすでに終わったから、それをモノサシとする立場は自壊し、その立場に悩まされる惧れはなくなつた。

五 善の再生産と公共財の働き

（一）公共財の意義

ところが、さらにもっと深く掘り下げて考察すべき事柄が、善の再生産には存在する。すなわち、われわれ人類は、相互作用の当事者として、実は公共財（公共善の客体的な担い手）を必ず使用し

ているということである。そして、公共財を使用すれば、必然的に第三者に対してプラス、マイナスの影響を及ぼす——また及ぼされる——のである。

ここに公共財の使用というのは、先に述べたような「売ってよるこび買ってよるこぶ」ところの双方の当事者の間での市場取引の「内部の関係」を越えるものである。それは市場の外部への作用であり、これを経済学では「外部効果」(external effects)と呼んだのであるが、どのような内部の取引関係にも必ず例外なく、この外部効果は発生していると考えられるのである。売ってよるこび買ってよるこぶというのは二方善としてよいが、それで「めでたし」というところで終わるような理解は、この外部効果の事実を表現していないという意味で、不完全なものなのである。こうして見ると、われわれは、自分たち当事者の間で契約を交わし、契約を履行し、相互の満足、言い換えると相手との間の「善の相互提供」で満足するだけではないことがわかる。

外部効果には二つの種類のものがあって、一つは「正の外部経済」(external economy)、他の一つは「負の外部経済」(external dis-economy)である。¹⁶⁾

正の外部効果の例を挙げると、梨園を経営している農家があり、梨の白く美しい花が満開であるとしよう。梨の花の咲く頃、梨園の近くに養蜂業者がいて蜂蜜を集めているとすれば、業者は蜂を空中に飛ばせて、梨園の可憐な花から蜂蜜を集めてこさせて利益を得る。そして、梨園の農家はそれによって梨の花の受粉——おしべとめしべの間での花粉の運搬と接触——を手助けしてもらう。しかし、梨農家は養蜂業者にそのためのコストを支払うわけではない。他方、養蜂業者もタダで利

益を得るのであって、農家に蜂蜜の代金を支払うわけではない。これは、蜂蜜家と農家とが、契約関係は結ばないけれども、契約関係での売り買いという市場取引でなく、その「外部」において、プラスの経済活動すなわちプラスの善の相互提供を行い、お互いに満足しあうという関係を生む。

これと反対の例を挙げよう。ここにある一つの化学会社があって、優秀な製品を開発し製造しているとしよう。そしてその製品は業者や消費者に広く歓迎され、引く手あまたで売れ行きがよいとしよう。この化学メーカーと消費者を含む取引相手とは、もちろん売買契約を結び、代金を支払い、または受け取るという関係にあって、これは契約と市場の「内部」の取引である。

しかしながら、その化学工場から人体に有害な排気ガスが漏れ出しており、また工場廃水が地下水に染み込み、やがて河川にまで浸出し、異常な形の魚類を発生させているとせよ。この場合に、メーカーの利益とその製品の買い手の満足だけに注目する狭い見方では、こうした環境汚染は無視される。そしてこのような外部不経済は、公共財つまり空気や水や大地を通じて、第三者にマイナスの善すなわち害毒を流すことになる。

われわれはこのような事態に直面して、昔から言われる「売ってよるこび買ってよるこぶ」という二方善の観点は保持しながらも、見方を拡大し、公共財の働きを視野に取り込まなければならぬ。これが自己、相手方、第三者に共に、公正な比率で利益すなわち善を実現したいという「三方善」の考え方なのである。

〈注〉

(16) 外部効果 (external effects) は古くから注目された事象であり、近隣効果とか溢出効果などと呼ばれるが、経済活動におけるそれを経済理論として体系的に論じたのは、T・G・シトフスキーであって、

次の文献を参照。Tibor Scitovsky, "Two Concepts of External Economies", *Journal of Political Economy*, Vol. 62, 1954.

(二) 公共財の使用と公共心の涵養

こうしてみると、われわれの生命活動は、意識するとしなやかにかかわらず、いつでも、どこでも、三方関係において行われるのであって、三方関係をたえず理解し、三者の間で利害を調和させる努力を払わねばならないのである。その基軸となるのが「公共財」の取り扱い方であり、公共財を尊重する精神が「公共心」というものである。

公共財とは、各人が排他的に所有する私的財ではなく、各人の私的財の範囲を越えて存在し、各人にはそれを利用する使用・収益権のみが許され、それを破壊したり処分したりする処分権は認められないような財を指す。ただし、公共心は公共善の尊重のみでなく、すべての人々の尊厳と私的善を尊重するという全体への配慮も併せ含むものであることを忘れてはいけない。

われわれは、私的な善を追求するときに、瞬間たりとも、またどこに行っても、必ず例外なく、公共財を利用している。ところが、公共財に関しては、私的財と異なり、社会のメンバーがそれを利用するについて、他を排除する、つまり自分だけが利用し、他者に利用させない、そして利用上

の費用も自分が負担する、という「排除原則」(exclusion principle) が成り立ちにくい。

街を歩いていると時折見かけるが、「何々不動産の管理地」といつた立て看板のある空き地がある。これは、他人が不法に侵入し、一夜にしてバラックなどを建てて住みつくことのないように、「ここは誰々の土地である」ということを公示しているのである。一たん住みつかれてしまうと、それを排除するには裁判まで行ったりして、大変な時間と費用を浪費することになるのである。権利には自分で守るといふ義務がともなう。権利の上に眠る者は権利を失なう。

最近では「分煙思想」が普及してきて、喫煙する人としなやかでない人との間で空気という公共財を分割し、喫煙者の利用を厳しく制限するという風潮が強くなっているが、これとても吸煙・分煙装置が十分に働かないことがしばしばあるように、空気の利用を他者に禁止することは容易でない。だから、どうしても、たばこの煙による公共空間の汚染が起きるのである。

公共財はまた、それを生産しあるいは提供するために当然費用がかかるが、その費用負担を利用者ごとに明確な方法で割り振ることが難しいという性質を併せ持つ。公共財の利用者の間では、費用負担の配分は明確には行い難いのである。夜間に沖合を航行する船は、灯台の光を利用するが、光の利用量に応じて、灯台の建設費と維持費を分担するわけではない。

負の外部効果を抑える方法としては、例えば、「街の環境」という公共財を清潔に維持するため、汚い形で投棄されたゴミを清掃するという公共財維持の費用の調達と負担にあたり、一人ひとりのゴミの不法投棄者を監視し、違反者を捕まえて罰金をとるという方法が考えられる。けれども、

その監視のためには、真夜中でも監視人を動員しなければならず、それでもなお、監視の目を盗んでゴミを不法投棄する人は跡を絶たないだろう。

そこで、もう一つの方法として「ゴミの有料化」という仕組みが考えられるのだが、これとても利己的な人間の多い社会では、ゴミ出しの料金を支払う義務を免れようとする不届き者がかなりの数発生する。したがって、こうした欠陥を補うために公共当局が財政の資金を使って、ゴミを清掃するという方法を用いざるを得ない。現に今日ではこの方法が、監視の方法及び有料化の方法よりも、基本的な方法として定着するのが現状である——なおもう一つ、コンビニのゴミ箱（私物）がドライバーのゴミを引き受けるという奇妙な役目を演じているが、これは一種の「私物の公物化」——というより他人の私物へのただ乗り——であろう。

各種の方法をどのような比率で組み合わせ、ゴミ清掃に効果をあげるかは、一にかかってその社会の人々の道徳性（心と行為）の水準による。¹⁷

〈注〉

(17) 外部効果を発生させる行為のうち、物質エネルギー的な——さしあたり心理的作用は考慮外として——マイナス効果を抑えるには、次の四つの方法がありうる。

①法律の定めるところにより、その行為を禁止し、

違反者を処罰する方法

②発生者が、そのマイナス効果に対する補償を被害者に直接支払う方法

③発生者が税を支払って、国家や地方自治体がある補償を行う方法

④国家や自治体が、発生者に補助金を与えて行為を改善させる方法

そして案外知られていない点だが、たとえプラスの外部効果の場合、人々の善を高めるようでも、社会にとって「過剰な効果」、つまり人々の満足の必要度を超えてまで効果を高めるものがあれば、それはチェックし抑制されねばならない、ということがある。社会の手段善である人的資源や物的資源や時間や空間を、「過剰なプラス効果」の発生に投入し、浪費することになるからである。例えば、広告やライトアップなどの大都会の夜のネオンは、明るすぎるのであって、いくらそれによって消費者を誘って売上が伸びるといっても、それは浪費である。また、

暗い夜道は危険だからというので、国中どこでも街灯を皓皓とつけるのはどうか。明るければ暗いよりも治安がよくなり人々は安心できるといっても、電気の浪費であり、それよりも治安を良くするように他の政策を講じるべきであろう。やはり、夜空は暗くて星が見えるのが、正常な文明ではないか。企業が、ネオンや照明を節約しつつ治安を良くするイノベーションを行えば、それは三方善につながる。

（ここでも「過ぎたるは及ばざるが如し」であって、

外部効果は、マイナスでもプラスでも、社会の人々の精神善としての「最適満足度」を充足することを基準として、加減しなくてはならない。ここで言われるのは「手段善の浪費の戒め」であるが、これは善の生産というより増産に関して、重要な課題である。すなわち、われわれの本当の課題は、「一定の物質エネルギーという手段善を用いながら、目的善である精神の安定と喜びをいかに永続的に増産することが出来るか」にある。

三方善の究極の目的は、われわれの心のあり方を変革して、最少の手段をもって最適の精神的喜びを得るということにある。これは何も新しい気づきではなく、古来からの人類の宿願であり指針である。お互いの心の持ち方ひとつで、喜びは、万人において、ほとんど無限大に増産することが可能なのである。だから、われわれにとっては、三方善の実現において共同して「心の持ち方の進化」を促進することこそが肝心なのである。これは決して精神主義ではないのである。

中国の古い言葉に「積善の家には余慶（あまりのよろこび）あり」というものがあるが、家というのは現代では家族であり個人ともいえるので、家を社

会と言ひ換えると、結局、三方善とは、「永続する喜び」という意味の精神善を社会の誰に対しても高めることに尽きる。こう考えれば、幸福観を含めて

思想も、学問も、社会の仕組みも、大きく変化するであろう。この点、望月幸義『道徳実行の喜び』(廣池学園出版部)を参照されたい。

(三) 「コモンズの悲劇」という難題

もつと一般的に、大小の範囲の三方善を考えるには、「コモンズの悲劇」(共有地の悲劇、The tragedy of commons)という考えが有益であろう。これはどういうものであるかといえ、今かりに小さい範囲での村の人々が共同で、草刈り場として利用している放牧地があるとしよう。お互いが何の制約もなしに、自分のありつたけの家畜を競い合つて放牧するとすれば、放牧地の草はたちまちのうちに食い荒らされ、挙句の果ては家畜のひずめによって踏みつけられ、地肌がむき出しとなり、みずみずしい草は得られなくなるであろう。現に私は、一九八〇年代初め、ヒマラヤ山麓の村における羊の放牧地帯で、このような状況に出合った。

これと同じ危機は、漁業にも——しかも国民の趣味である釣りにおいても——起こるところであつて、各国が漁船を建造し、資本の力に任せて漁業労働者をかき集め、大量の漁獲を狙つて操業を競うならば、多くの魚種と資源が枯渇に瀕するであろう。大気や大地や水の汚染、地下水の問題、電磁波による空間の侵害、騒音問題など、すべてが同じ性質のものである。

かような公共的な財(富や資源)の過剰利用、過剰消費から、終には破壊に至る現象を「コモンズの悲劇」という。これはガレット・ハーディン(Garrett Hardin)という人が力説したところだが、何も彼の警告によるまでもなく、昔から人々が気づいて取り組んできた問題である。ともかく、今まさにわれわれは、地球環境という最高最大のコモンズつまり公共財を、工業化と文明化によつて、人類が——個人も——恣のままに過剰利用するところに到っており、それが地球というコモンズについて、悲劇をもたらしているのである。

したがつてわれわれは、三方善を実現する基礎として、公共財に着眼し、公共財の尊重と保全を意図的に行わなければならない。国民の道徳教育の基礎としていわゆる「公共心」の培養と発動が力説されるが、その意味するところは、このような公共財の見方に立つものでなければならぬのである。

コモンズの維持管理には、現実には歴史上さまざまなものが行われて来たが、その中で有効なものはすべて「共同体」(コミュニティ)を前提としている。それらは、誰がどこの人物か、誰がどれだけ利用したか、使用(需要側)についても費用負担(供給側)についても、おおよそ確認できるような共同体的な仕組みが存在するときのものである。

ここで、かつて農村共同体に実際に存在し、長く行われた共同採草地の管理について、一つの実例を紹介してみよう。河川敷の草地——河川は国有だから集落の共有地ではなく共同利用地——に、牛に食わせる良質の草が毎年育つ。十一戸の集落農家が、毎年集まつて寄り合いを開き、その草地を一口当たり草の収量が平等になるように地割りする。割り当て面積は土壌の条件に差があるから

毎年広くなったり狭くなったり変化する。夏の台風による洪水で草地は変形するから、毎年会議を開いて割り当ての場所と面積を変える。十一年で一回りする間に、おおよそ十一戸のどの家にも不公平ならぬように、分け方に工夫をこらす。

もちろんこれが唯一の方式ではないが、これこそまさしく、どこの、誰が、いつ、どこの区画を利用して、どれだけの益を得たかを、「皆が見て知っている」のであり、共同体の仕組みの一つである。これは、マルクス主義に立つ社会主義ではなく、個人の人格と私的所有を認める共同主義であって、それなりに三方善が見事に実現していた。これは、大化の改新のころに国家的規模で行おうとして成功しなかった「公地公民の制度」に近いともいえようか。

このほかに、売り買いの方式を導入して、区画した草地ごとに競争入札の仕組みを使うこともできる。この方式によると、十一戸への十一年間での草地の配当は平等とはなるまい。くじ引きの方法もあるが、これもなかなか草地の平等な分配という結果に到達しないだろう。

われわれの人間社会では、どの方式——目的を実現するための手段・手続き——を採用するかを選択自体も、三方善の中に含まれ、結果を左右するのである。目的、手続き、結果はどう関係するか、これは昔からの政治の難問なのである。共同体が破壊され、どこの誰か分からない人々が、いつ、どれだけ、コモンズを利用するか、それが確認できないような社会になると、コモンズの維持管理の方法はとたんに極度の困難に出会う。

だから三方善は、歴史的段階と共同体の変化に応じて、異なる様相を帯びる。そもそも、改めて三方善が必要とされるのは、資本主義という社会が生まれ、私欲にかられた自由な経済活動が一般化するようになり、共同体的な基礎が崩壊したことの証であり、三方善とは、「如何にすればそこに共同体的な行為原則を新たに作り出すことができるか」という問題なのである。

またさらに、グローバル時代となり、技術革新が進み、遠洋漁業の会社が公海で操業し、鉱山会社が深海底の資源を採掘するなど、国家を超える地球的公共財が重要な役割を演じる時代となつて、三方善の問題がまったく新たに地球のスケールで出現しつつある。炭酸ガスによる地球温暖化の防止への取り組みや、捕鯨を禁止する条約の問題などは、その現れである。この段階での地球の三方善の実現方法は、国家の利己主義が台頭して、ややもすると「ジャングルの無法」が顔を出すだけに、残念ながら有効な方法はいまだ確立されていない。

〈注〉

(18) コモンズの悲劇については、Garrett Hardin,

"The Tragedy of Commons", Science, 1627, 1986.

コモンズ(共有財産)をどのような方式で維持して

いくかには、さまざまな型があるが、その点は、浅

子和美・国則守生「コモンズの経済理論」、宇沢弘

文・茂木愛一郎編『社会的共通資本』(東京大学出

版会、一九九四年)。また、公共財と密接にかかわ

る社会的共通資本の概念と理論について、詳しくは

第一章の宇沢論文を参照されたい。

この分野の研究における世界的権威、宇沢教授に

よると、社会共通資本には、三つのものがある。①

自然環境からなる自然資本と、②社会インフラスト

ラクチャーつまり社会資本と呼ばれるものとしての

堤防、道路、港湾、電力、ガスなどの供給施設、

上・下水道、さまざまな文化施設など、及び③制度

の制度をはじめ、司法、行政、金融、警察、消防である（一七〇—一八ページ）。このほか、国連など国家間の集団安全保障、PKOなどの国際的活動システム、国際的な公共の電気通信制度、国家が関係するさまざまな国際条約、特許など国際的な科学技術制度といったものも、国際的な意味の社会資本として、この制度資本に含まれるといえよう。

なお、いわゆる「多国籍企業」は、地球的なスケールで、公共財とコモンスの悲劇の問題を引き起こしかねない。石油を運ぶタンカーは、原油を陸揚げして空になった船の底に大量の海水を積んで油田地帯に向かうというが、その水はどう処理しているのか。往路は、産油国に必要な清水を積んで行くことはできぬものか。また、各国の原子力潜水艦は、原子炉の廃水を大海にタレ流し、人知れず公海を放射能で汚しているのではないか。

もちろん、コモンスには、自然の環境及び資源という「自然コモンス」の領域だけでなく、社会的共通資本という形での公共財、つまり「社会コモンス」の領域がある。その最たるものが国家と地方自治体の公共財政であるが、これは基本的人権のうちの社会権——誰もが人間として必要最小限の健康で文化

的な生活を営む権利であり、社会の公共善の中からそれに必要な分け前に与かる権利があつて、この権利自体は本来、国民の誰も除け者にしないという三方善を目指す権利である——が強く認識され、その結果として福祉国家が発展する。それにつれて、公的福祉基金への国民の要求が高まり、それが国民の要求を表現し集計する民主主義の政治制度つまり「ばらまき行政」といわれたものと結合して、公的福祉基金が膨れ上がり、公共財政が赤字に転落するという事態になつたのである。公的福祉基金は、いふならば社会の人工的共有地であり、安心の基礎であるが、他面それは「砂糖」のようなものであり、それにアリの寄つてたかつて食い荒らすように「コモンスの悲劇」を生み出すことになる。

福祉国家の危機とは、生活保障、老齢年金、医療保険などさまざまな形で、公的基金への要求が増大し、公的財政の赤字が累積するという事態を指す。おまけに、ケインズ経済学が教えるところを裏付けにして、公共投資による有効需要の補完という政策が活用され、公共事業という名によって、失業と成長維持のための——多くが不要不急の——土木事業や公共建造物の建築（箱物行政）の肥大化が起こる。

その政策は、官僚、利権政治家、利益集団の間の（時に住民も含めた）結託のせいで過去の計画どおり着工され、財政の赤字に拍車をかける。そういう状況が、民主主義の政治的仕組みと結び付き延々と続く。

難波田春夫教授はこういう大衆社会の民主主義を「組織化された大衆民主主義」(organized mass-democracy)と名付けて、一九七〇年代からその病理に警告を発し、低成長に應じるため、所得の分捕り合いではない協調方式による所得分配（コンサート方式）に注目すべきだと述べていた（『危機の哲学』初版一九七四年、著作集、早稲田大学出版部、

第三巻、一九八二年、一一八—一九ページ）。

今あれから三十年後、日本では、協調方式ではなく、厳しいグローバル市場主義が進行してデフレをもたらし、右の提案と同様の結果を、否応無しに人々に強制しつつある。官吏の給料引き下げ、労働者の賃金引き下げ、デフレによるあらゆる業者の収益の引き下げ、年金の引き下げ、各種保険の自己負担額の引き上げ、などがそれである。国家全体での三方善から見ると、いつまでも誰かが特別に得をするようにはならない。真理は自らを貫徹するようである。このような人類社会の真理を自覚して行動する国民は、より苦痛が少なくて済むであろう。

六 会社の経営と三方善——一つの応用問題——

(一) 株式会社と利害関係者

現代社会の最も強力な経済組織は株式会社である。ゆえに、それにかかわる三方善について、思考実験を行ってみよう。会社とは、①共通目的を持った「人々の集まり・仲間」(company)、②「新たな創造活動を企てる組織体としての「企業」(enterprise)、③力を合わせて仕事をする「協同組織」(corporation) というような三重の意味を帯びた人間の組織体である。会社には、合名会社、

合資会社、それに株式会社という種類があるが、今日の中心は株式会社である。つまり資本（株式）を出し合う会社——株主が支配する組織——であり、それを導く哲学は「合本主義」（明治時代の濫澤榮一しきざわえいいちによる命名）といわれた。これは「組合」と異なるが、組合は非営利組織であるのに、株式会社は堂々と利潤追求という目的掲げる営利組織であり、利潤追求を正当な目的とすることを人類社会が公認する組織だ、ということにある。利潤追求を目的とせず、また利潤をあげ得ない株式会社は、社会から期待される目的を果たさない約束違反の会社である。それでは「ネズミをとらない猫」であり、「歌を忘れたカナリヤ」である。

こうした株式会社において、どこまで三方善が実現できるか。それは、社会主義亡きあとの資本主義にとっての一大試練である。

株式会社は言うまでもなく、株主（ストックホルダーまたはシェアホルダー）が資金を提供し株式に投資して生まれる組織であり、この点から言えば、会社は株主の所有するところである。そして、株主たちは集まって会議（設立総会）を開き、所有者として意思決定を行い、経営者を雇う。多くの会社（法人）は、最初の株式投資を行う人が同時に経営者でもあるという「オーナー会社」であるが、その場合には、株主と経営者とは同一人物ということになる。

次に、会社は従業員を雇い入れ、生産と営業の活動を開始する。そして会社は、原材料とか部品の納入業者や、製品を買ってくれる顧客つまり問屋や消費者と、取り引きを行うことになる。またその際、金融機関に株式を買ってもらい、運転資金などを融通されるとすれば、金融機関もまた会

社にとっての重要な利害関係者の一つとなる。さらに、会社は地域社会の中で事務所や工場や営業所を設置するから、地域社会の人々との関わりも無視することはできない。

そうしてまた、会社にとっては、地方自治体の政府と国家の中央政府という利害関係者が、不可欠の役割を果たしている。つまり地方的あるいは全国的な公共財の供給がそれであり、そのために必要な費用の調達としての租税の徴収——これも公共財——である。例えば、豊田市に工場を持つトヨタは、直接間接、公共財である高速道路などを絶えず利用することで、ジャスト・イン・タイムの企業活動を可能にしている。円滑に流れる道路網という公共財があつて初めて効率の高い生産活動は可能となる。

政府も利害関係者であつて、会社の経済活動にとっての公共財であるルールを設定し、ルール違反者の取締りなどを行い、またいろいろな経済情報の供給も行う。例えば、食品や医薬品の安全に関する情報の提供などがそれであり、景気に関する統計情報の提供も無視できない役割である。あるいは、環境保護のためのルール作り、規制、補助などの行方も行う。

さらに、普通の企業理論では着目されないが、善の理論から言えば、会社というものは人間組織であり、会社に利害関係を持つ人々にとっては「善の種子を無償で恵んでくれた恩人の系列」というものが存在する。会社という組織体にとっては、会社の設立以来今日までの歴史において、善の種子を代々受け継ぎ、譲り渡してくれた恩人の系列というものがある。

以上述べたところを総合すれば、会社という人間組織体には「利害関係者」(stakeholders = ス

テイクホルダー」というものが存在するのである。広く考えると、この中には競争相手の企業を加えることも可能であろう。なぜなら、同業他社と競争することを通じて会社は技術を磨き、創造力を高め、その結果として会社自身の利潤という私的善を増加させ、さらにそのことが社会のメンバーに直接間接、善をもたらすことがあるからである。また逆に、「ステイクホルダー」というときには、これらの企業は含まない。

〈注〉

(19) 今日の会社は、グローバルな市場経済の中に生きる。その市場経済は三方善を実現しようとしている。現代世界の大勢は市場経済であり、そしてそこでの取引のルールは、第二次大戦直後一九四〇年代末に発足したGATT(関税と貿易に関する一般協定)を発展させたWTO(世界貿易機関)の協定において、総合的に取り決められており、その要旨は最も簡潔に述べれば次のとおりである。

①自由取引の哲学——国家間では、市場機構を用いた自由取引が世界人類の経済的福祉を最大に高める、つまり三方善を増加させる。

②相互主義・互恵主義の原則——各国間では、経

済活動の機会が相互に等しくなるように認め合わねばならない。例えば、日本政府が日本国内で操業を認める米国銀行の店舗数と同じだけ、アメリカ政府も日本の銀行のアメリカでの店舗数を認めなければならない。これは結果の平等を主張するものだが、相互主義とも互恵主義ともいう。一般にはここまで対等ではないが、この原則は言い換えると法の下の機会均等ということである。

③国益保護のための交渉——各国は、貿易紛争を解決するために、WTOに提訴し、交渉する権利を有する。

われわれは、WTOのメンバーである限り、個人としても会社としても、国家としても、世界中の相手と、自由公正に取引してよいというわけである。

このWTOの仕組みは、国際的な場で三方善を実現しようと意図して作り出されたものであり、各国の「国家主権平等の大原則」に立ち、「相互主義」という法の下での機会均等の原則」を踏まえるかぎり、自由な取引こそが人類の善を遍く増加させる、という哲学の実現である。そして、自由取引があまりにも弱肉強食となり過ぎるときには、各国は自衛措置と紛争処理の方法を活用してよいというものである。このWTOは世界的スケールでの「公共財」の一つである。

昔、一九二〇〜三〇年代に、日本が新進工業国として世界経済に殴り込みをかけ、それに恐怖感を抱いた欧米列強からABCDライン(米、英、オランダ、フランス、中国など)といった形で締め付けを

食らい、終には世界戦争に突入して行った時代と比べれば昔日の靚があり、人類社会は少しずつではあるが三方善に向けて前進しているといえるだろう。しかしわれわれは、会社儲け主義と顧客満足主義(消費者主権主義)のみに依ってはならない。特に地球の資源環境問題、各国文化の破壊や画一化などの問題からすれば、「自由取引必ずしも公益を実現せず」と疑問視されている側面のあることを、決して忘れてはならない。グローバル市場主義は大勢ではあるが、その礼讃のみでは真理に違反するのである。

大勢には善きものと悪しきのとあり
大勢に逆らうもの、または順うものは滅ぶ
順いつつ真理を守るものが残る

(一九二〇年代、廣池千九郎の警告)

(二) 会社経営における三方善の実現方法

かようにみえてくると、それぞれの企業や会社が三方善を実現するにあたって、大筋でもって、どのような順序で善の増加を図ればよいか。いわゆる「社会的責任」も問題である。

第一には、「地球的公共財」の保全すなわち地球資源の合理的利用と地球環境の保全がそれである。会社は生産や販売の活動を行うが、そのとき前にも述べたように、地球という公共財を使用せざるを得ない。地球公共財を使用することのない会社はこの世に一つも存在しない。したがって会社の活動においては、まず第一に技術革新を行い、資源節約と環境保全に貢献することが日常茶飯の三方善の行為なのである。

会社が生き残れるかどうかは、結局、社会の真のニーズに合った製品とサービスを開発し提供できるかどうかにかかっている。長期的に見て不可欠の方向は、環境保護に役立つ技術開発であるが、その要点は3R、つまり①リデュース (Reduce) 資源節約、廃棄物減少)、②リサイクル (Recycle) 廃棄物の循環)、③リユース (Reuse) 長持ちと再利用) である。

筆者は、一九八〇年代初めにイギリス留学中、由緒ある家系の法律家としばしばお付き合い願ったが、時折縁の擦り切れたような羊毛製の年期的に入ったネクタイをつけておられるのを拝見した。また、下宿先の初老の奥様はミラノの元市会議長のお孫さんとかでイギリスにお嫁に来た人だが、祖父の使っていた古いイスをリビング・ルームで大事に活用していた。イギリス文化の息の長さを垣間見たような気がする。

なお、大量画一安価の製品はそれ自体は間違いなく便利であるが、資源浪費と環境破壊を促進しやすいので、注意しなければならない。われわれ消費者は私的善としてそういう品物を求めるが、その行動は一人ひとりの人間の心というものが持つ狭い自己中心性からくるものであるうか。この

ような心の峠をどう乗り越えるか。会社だけでなく消費者にも同じ課題がある。一人の人生におけるいのちの維持にあたり、どれだけ地球への負担を軽くするかが、人類の究極の課題なのである。これは、物質文明の以前に、人間の欲望を左右する精神文明の在り方にこそかわる。

第二には、このような配慮をしながら、取引相手の「顧客満足」(customer's satisfaction) を図ることである。すなわち取引業者及び消費者に対して、「交渉」を通じて適切な取引条件を合意し、それを履行するのである。これはいわゆる「売ってよろこび買ってよろこぶ」というように、売り手と買い手との間での、契約内部での、相手への思いやりをもって事足りる性質のものである。

そのとき、同業他社との競争においては、やはり法に基づく公正な競争を十分に行うことが望ましい。近年、日産が危機から立ち直り、トヨタに次ぐかつての第二位メーカーの地位に復活したが、それはフランスのルノー資本の後押しで新しく社長に就任したカルロス・ゴーン氏のスゴ腕によるリストラのたまものである。そしてその裏には、納入業者に対する製品コストの切り下げ要求のすごさがあることも忘れてはいけない。しかし、もはやグローバル市場化時代は、「またしても泣かされるのは中小の納入業者である」などと弱音を吐いていて済まされるご時世ではあり得ない。

競争がグローバルな範囲で行われ、日本国内の空気にひたって温情に甘えることは許されなくなる。これまで二ヶ月もかかっていた金型の試作が二、三日くらいで出来るというような一大技術革新が、その背景にあるからである。この点は、この分野で技術革新を現実に指導した山田眞次郎氏が『大転換思考のすすめ』(講談社現代新書)で述べているとおりである。一国的三方善は地球的

三方善へと拡大されざるをえない。

市場経済においては、もちろん長期的な系列取引のような安定した型の相互作用も一概に否定することはできないが、系列取引があまりにも固定化し、閉鎖的となってしまえば、新しく現れた新進の創造的企業が市場に参入することを妨げられる。その結果、真の技術革新と創意工夫が阻害される事態となる。

第三には、会社は「従業員」の私的善すなわち利益を十分に保障しなければならない。その福利の水準は従業員と経営者との間のインフォームド・コンセントすなわち交渉に俟つべきものである。したがって労働者・従業員のさまざまな交渉システムは、旧式で固定化した労組にこだわらず、自由組織することが認められねばならない。

この点に関して、会社の不正行為や不祥事を暴露するための、従業員による「内部告発」(公益通報制、whistle blowing)の問題があるが、これについては会社側は法律に基づいて、経営行動の質的改善のために、また取引相手に対する安全性の確保のために、努めなければならない。²⁰⁾

第四に、会社は「地域社会及び国家社会」の中において公共財を使って操業するものであるから、地域社会と国家社会に対してそれ相応の貢献をする必要がある。すなわち納税その他の方法を通じて、地域社会と国家社会の公共財を維持し、増進するのである。

第五に、こうして、会社の税引き後の利益は、「経営者の報酬」と株主に対する「配当」とに分配されることになる。

以上は、会社の財務諸表における利益計算と利益配分とに現れている善実現の順序でもある。

ところで、いまだ世間では真剣に問われることはないが、株主の「投資者責任」(investor's responsibility)というべきものについて考えておかねばならない。株式市場で株価の変動を利用しあるいは操作して売買益を稼ごうとする「投機」(speculation)は論外であるが、自己の資金を何れかの会社のために「投資」して、社会に有益な経済活動をするようにその会社に期待するのは、正常な行動であり、そこには「投資者責任」が果たされているといえる。株主は、株式会社という実力組織を正常に行為させる有権者でなくてはならず、会社の活動の内容にまったく無関心で無責任な投機家であってはならぬのである。しかし、現在資本主義社会のしくみは、ハゲタカ的な投機戦へと、善良な大衆さへも誘惑するように出来ているから困るのである。

ただし、投機と投資とは、その境界があいまいであって明確な区分はできない。世の中には利己的な行為の「意図せざる効果」が思わぬ善の増加につながることもある。「禍福あざなえる縄のごとし」「陰陽一体」という現象もあるわけである。²¹⁾

ともかく、二十一世紀における世界資本主義の最重要な改善点は、地球環境の保全と、株式会社のガバナンスと、市場におけるグローバルな投機をいかにコントロールするかにある。

〔注〕

(20) いわゆる「内部告発」は、「警告の笛を吹き鳴らす」という行為であるが、組織のメンバーが、組織のメンバーの「誰か」を、あるいは「組織としての行為」につき、その情報を官庁とかマスコミあるいは競争相手など、組織の外部に通報することをこう呼ぶ。それは、私的な恨みつらみの理由で組織の内部事態を告発するものから、真に社会の公益の観点からみて組織内部の事態をやむを得ず通報し、事態の改善をはかるというもので、広い範囲に及ぶものがある。いずれにせよ、問題は組織内部で速やかに解決し、解決できないものは法にのっとり、外部に通報するという方法で、解決するほかない。今日、「公益通報制度」という呼び名で、イギリスの制度に範を取り、日本でも制度作りに取り組んでいる。しかし、やたらと内部告発する以前に、次の順序で問題に取り組むべきである。

- ① 先ず組織の内部の問題が発生した部署で、上司・管理者に通報し、その部署で迅速に解決策を講じる。
- ② その部署で解決できないときには、組織のより上位の責任者に通報し、解決策を取る。

とそれ自身が善(財)なのである。この意味から、三方善を実現するためには、われわれは、他者あるいは組織団体に関する情報(及び知的所有権)を尊重しなければならないわけである。

第二に、情報公開において論争になるのだが、いわゆる個人情報とプライバシーとは同じではない、ということに注意を払うことが必要である、個人に関する情報ならすべて公開を拒否する権利が当の個人にあるというのではなく、その中でプライバシーとは「個人情報のうちで、その人が公開を拒否する権利を持つ情報であり事柄」のみである。そして、プライバシーは個人だけでなく、企業とか国家行政団体などの組織団体にもあって、それを犯すことは私的善の侵害となり、三方善からは遠ざかる結果となる。

第三に、公開と非公開との間の境界は社会とか文化の違いによっても、時代によっても、そしてまた公開先の如何によっても、大きく異なる。ある人の仕事と収入に関する詳しい情報は、みだりに公開されるべきものではないが、国家に対する納税の場合には、国家の機関である税務署には公開(申告)すべきものである。プライバシーに関する詳しい見方

③ それでも組織が迅速に解決策を講じないときには、放置してれば危険や不正が拡大するから、速やかに外部の責任のある行政当局とか、マスコミに通報し警告して、解決を促す。

しかし、いたずらに組織秘密を外部に開示するのは、「正当な内部告発」の範囲を逸脱するものであるから、組織のメンバーは厳格に自制しなければならない。そして正当な告発者には、組織はその人物の利益を保護しなくてはならない。告発の手続きについては、リチャード・T・デイジョージ『ビジネス・エシックス』(明石書店、一九九五年)を参照。

この内部告発は「情報」に関する問題の一つである。三方善に到る道には、第一に、「情報財」の扱い方が、「プライバシー」(privacy)の問題として、微妙な影を落している。(イ)個人では個人情報つまり氏名、住所、遺伝子、その他個人のみ所属する情報、(ロ)組織団体では、例えば企業秘密あるいは国家の外交機密は、各々に独自の私的財つまり排他的な私的所有の対象になる秘密情報(情報財)として、それぞれの個人や組織体が公開を拒否する権利を有する。そういう情報の秘密が保護されるこ

は、アミタイ・エチオーニ『新しい黄金律』(麗澤大学出版会)に付した「監訳者解説」に述べたので参照されたい。

(21) ここで「投資」(investment)と「投機」(speculation)について、三方善の立場から比較しておきたい。投資とは新たな善(財)を生産するための善の投入であり、他方、投機はリスクを懸けての生産というよりは「善の分け前」を要求する行為である。投資と投機とは見た目には区別しにくい局面もある。例えば、飢饉など天災のときのために食料を備蓄して、本当に飢饉や地震が襲来して人々が空腹に悩み、食品が大幅に値上がりしたので、「これぞ千載一遇のチャンス」とばかり備蓄倉庫を開き食料を売りさばいて大儲けをする。この場合には初めからそうすることを狙った行為ではないが、結果的に投機となる。日本の一九七三―七四年のオイルショックのとき、ほろ儲けた会社と、相変わらず平常のときの値段で取引した会社とがあったが、初めから儲けることを狙って備蓄するのが本物の投機である。

投資と異なつて、「投機の本質」は、直接その行

為により善（その担い手である財）が人類社会に増えないことであり、ただ値動きを利用する金銭的収益のみをねらうということにある。投機は、そのほとんどが社会の実質的な善を増加させるものでなく「積不善」となりやすい行為である。大量の外国通貨の売り買いや株式の売り買いには、将来のための合理的な「リスクヘッジ」というより、自分の私利私欲のみを増やそうとする単なる利己的な荒稼ぎの行為でしかないものが多い。

しかしながら投機——と考える行為——には、その行為をするものが「将来の変動に由来するリスク」を進んで負担し、そのお陰で社会の多くの人々がリ

スクを免れる、というメリットが生み出されるといふものも可能である。それゆえ、現代のようにグローバル市場化のために不確実性の高まる社会では、投機の中には奇特な人々による「必要性のあるリスク負担行為」として評価されるものもある。これをひっくり返して古い言葉のままに投機というのは適切でなく、新しく適切な用語を作るべきである。すべての行為が悪者であるのではなく、どんな種類の行為か、三方善につながるかの判別基準は、その行為により人類社会に三方善（財）が増加するかどうかにある。

（三） 会社における恩と報恩

先に述べたように、歴史を有する人類の社会には「恩人」(benefactor) というものが存在する。現世代に生きるわれわれは、恩人なしには今日生きてはいない。会社にも会社のために善の種子を植え付け、代々善を譲り伝えてきた恩人の系列が存在する。現代の会社にも、稀にはあるが、そのような恩人の系列に報恩するものが見受けられる。

報恩ということを考えるにあたって、善の定義を思い返して欲しい。先ず恩とは「無償の善の恵み」であった。そこでこの恩に対する報恩は、次のような順序に沿って行われる。

- ① 会社のために尽された恩人のうち、「故人」に対してはその恩に感謝し、「われわれもまた善の増産に努めます」ということをその恩人の「みたま」（御霊、たましい）に誓う。
- ② 次に、「生存の恩人」には、人生の晩年を健康に暮らして頂き、「終身、善に尽くし、安心して大往生をして頂くように」と念願して孝養を尽くす。この孝養にはいろいろな方法がありうるが、精神的な方法と物質的な方法とが考えられる。
- ③ それから「同世代の人」には、各国の法制によっても多少異なるだろうが、おおむね会計の手続きに沿って、善の分配を行う。
- ④ そうしたうえで、明日のための善の生産に向けて「投資」を行う。投資とは、明日の善の種子の増加のために行う善資源の動員なのである。
- ⑤ 今日のようなグローバル化時代には外国に出かけて操業することが多い。その場合には「受け入れ国」（ホストカントリー）の恩恵に対して、十分に報恩する。

このような報恩の観念と報恩の実行に対しては、「何か変な宗教類似の行為であり、合理主義をもつて一貫すべき株式会社と資本主義には余計なものであり、排除しなくてはならないものだ」という批判もある。

しかし、こうした主張は、重大な事実を理解できない浅はかな人物の主張である。すなわち、「会社も人間の集団であり、人間の集団が先人から幾多の恩恵を頂き、そのうえで力を合わせて世の中の人々のために役に立つ品物やサービスを提供する活動を行い、それに対して報酬を頂けるか

からこそ、会社で働くわれわれの生活が成り立っていくのである」という善再生産の根本事実を理解できない人の言い分なのである。

彼は、ひからびたエゴイズム感覚しか持ち合わせていない人物である。彼の胸の内には、人間の有限性とそこから生じる罪や過失への「反省」の念もなく、また「感謝」も「祈り」もないのである。⁽²²⁾ 会社という組織団体が、いくら冷徹な利害集団であり、多忙極まる活動的な存在であり、そこに集う人々は「集まり散じて移り変わる人々」であり、腰かけの人々にすぎぬとしても、いなそのようなものだからこそ、利害感覚を越えてそれを支える精神と行為を欠いてはならぬのではないか。

〈注〉

(22) 第一級の国家でありながら、アメリカほど歴史が浅い国家は他に存在しない。しかし、アメリカは分家であって、実はアメリカの中核は古代ギリシア、ローマ帝国、ゲルマン民族、アングロサクソン、ラテンと、長い承諾を受け継ぐ由処ある「分家」であり、アメリカほど宗教国家であるような国家も存在しない。ところが、アメリカ資本主義ほど宗教から無縁の会社組織が活動する経済もない。プロテスタントとは、「意図せずして資本主義を生み出した」

という程にも、強烈にして純粋な信仰のエネルギーを秘める人々であったはずだが、惜しいかな、ここに述べる「恩」と「報恩」の思想と行為が彼らには見当たらないのではないか。

仮りに、このように尋ねると、おそらく、「いやそうではない、他の所で報恩行為を行っているのだ」という答えが返ってこよう。ただし、報恩などというものは合理的でビジネスライクな「会社」という組織には、まったく余計なものであり、会社では思

いっきり儲けに没頭しなくてはならぬのであり、金儲けという仕事の終わったあとに、「罪滅ぼし」(贖罪)として、教会に、あるいは慈善活動に、あるいはNPOに、大学等に、多額の寄付を行えばよい、と。

現に、筆者の知人でビジネス・エシックスの優秀な専門研究家は、スイスのバーゼルの大学で教えていてヨーロッパのリーダーの一人だったが、アメリカのあるカトリック系統の大学がその卒業生から多額の寄付を受けて一つの専門講座——往々、寄付者

の氏名が講座につけられる——を開設したので、そこに専任教授として招かれた。彼は中国の上海にも出掛けて当地にビジネス・エシックスに関する研究教育の一大集団を作りつつある。寄付(報恩)の觀念がそうさせるのであろうか。

こういう信念と行為が、その信仰から生まれるのであるうか。一体、仕事と信仰とはどんな関係にあるべきなのだろうか。これは、企業行動とその中の人間の在り方にとって、極めて重大な問いであるので、どなたか識者のご教示をお願いしたい。

七 三方善と黄金律の実現

(一) 人類の生命活動の現実的指針

会社の場合に限らず、医や教育やその他あらゆる場合に、結局現代の三方善とは、次のような要点と実行の順序を通じて実現されるものといえよう。

- ① 法に従い(コンプライアンス)、受善、育善、讓善を実行する。
- ② 公共心を培養し、公共善と公共財を大切にする。
- ③ 恩人の系列に感謝し、報恩する。

- ④各人は、健全な範囲で自己保存を図る。
 ⑤自己と共に相手、第三者のすべての善を公平な比率（正義）において実現する。
 ⑥哲学的に言うならば、地上において、「神の平等愛の実現」を目指す。

世に「地球的に考え、足下から行為せよ」(think globally, act locally)という。自分の行為の波及作用について、遠く地の果てまで思いを馳せつつ、歩みは右足一步、左足一步、と着実に進めるというのである。いわば考え直された「一方善」から行い始めるのである。

人類は、古来、主に、宗教において、「黄金世界」というものを目指してきた。それは、さまざまな革命思想においても「コミュニケーション社会」などとして、理想社会とされた。協同組合をつくってきた人々は、今も、「一人は万人のために、万人は一人のために」というスローガンを忘れていない。⁽²³⁾現代の経済学、政治学、法学、社会学など人類社会のことを研究する「社会科学」においても、社会のメンバーの共存、共生、平和を否定するものは一つもないし、離婚や暴力を理想とする研究は、敵に勝つことの研究である戦争論などは別として、存在しない。

古代ギリシアのプラトンは先に『理想国』を書いたが、それは実現が難しいと考えて、のちに『モイ』(『法律』)を著し、実現可能性のある国のことを描いてみせた。われわれもまた、現実主義を採らねばならない。「三方善」の考えは、理想に近づく実現可能で有効な行為の組み立て方を指し示すものといえよう。

そして大切なことは、三方善という発想を持つ人の数を人類社会の中に少しでも増やしていくことである。そういう人が増えれば、それだけ三方善の行為が人類社会の中に積み重なっていく。すべての行為は意識、無意識ともに、心の中に意欲するものの現れだからである。

〈注〉

(23) 一般に「協同組合」(cooperative)は、資本主義の中にあつて、その利潤追求とは異なる動機目的を掲げて活動し、資本主義の汚れを清めようとする。

日本で最も著名な生活協同組合は賀川豊彦先生の「共栄共存」の理念を謳う「コープこうべ」であり、二〇〇一年に操業八〇周年を迎えた。その理念の再確認と現状の諸問題については、記念誌『コープこうべの理念を考える』(コープこうべ生協研究機構、二〇〇二年)における野尻武敏理事長(神戸大学名誉教授)による「今なぜ創業の理念なのか」を是非とも参照されたい。「コープこうべ」では、「生協は自発・自立・自治の生活共助組織」であるとされる。記念誌をお贈り頂いた野尻教授に篤く感謝申し上げます。

三方善という理想は、協同組合運動を含めて、古来、あらゆる倫理や道徳にとつての理想であるといえるが、いわゆる現代倫理では、特に生命を取り扱

う生命倫理の領域から発達して来た以下の四原理というものがあり、われわれに有力な指針を与えてくれるものといえる。

①正義の原理

これは、「この世にいのちを頂いて現れた人間は誰でも等しい機会を与えられて自らのいのちの可能性を実現する資格がある」という原理である。法の下の平等といってもよい。そしてまた、「三方善と正義」のところでも述べたように、この正義には、当事者の間の人間関係の局面に応じて、分配的正義、交換的正義、調整的正義という三種の正義類型があり、貢献・提供価値・罪に対し、それぞれ報酬・対価・処罰というものが公正に対応することを意味する。

②自律の原理

これは、先ず自己決定の原理であり、自己のことは自己自身で意思決定するというものであり、また

当然に、その自己決定にはその結果についての自己責任が伴うことになる。

③無危害の原理

これは、人間の相互関係において、相手にマイナスの善つまり危害を与えないという原理である。例えば、医者患者に対して医療過誤を引き起こしてはならないし、患者も医者の期待を裏切る態度をとり、誠実な患者として協力するのである。

④仁恵(慈愛)の原理

これは相手に対し、専ら相手の善を増加させるように行うという原理である。医者も患者も相手に危害を与えず、誠実に行い、善を最大化するよ

うに行うべきである。

以上は当たり前の指針であり原理であるが、現実の場面では、公共財の働きの作用し、また相互の内心の価値判断が加わり、どうしてもお互いの原理の判断が食い違ふことが多いのである。しかし、自らとしては、この順番を踏みながら、できるだけの注意深さをもって原理を実行するように心掛ける。そうすると、おおむね三方善が実現できる。この現代倫理は、自由・平等・博愛という近代社会のスローガンの抽象性、不完全性——弱肉強食を生んだ——を補い、進化させるものである。

(二) 精神善の開発

三方善のための根本の善事は、知識と行為方法つまり倫理道徳を人の心に移植し、一切の善を生産する人間の生産力、すなわち「精神の善に含まれる生産力」を高め、芽を出させ、育てることにある。三方善の核心は、この意味の精神の善を高め、分かち合うことに見いだされるのである。人間教育の本分もここにあらう。

釈迦の教えに、他者に財を施す「財施」よりも、「法施」つまり叡智・真理の学び、そういう心の「善種」を施しなさい、とあるが、人間界の善の真理を言い得て妙である。

比類なき実践的思想家の二宮尊徳は、「心田開発」ということを重視し、次のように述べた。

私の本願は、人々の心の田の荒蕪うらぶを開拓して、天から授かった善い種、すなわち仁義礼智というものを培養して、この善種を收穫して、又まき返しまき返して、国家に善種をまきひろめることにある。(中略)

そもそもわが道は、人々の心の荒蕪をひらくのを本意とする。一人の心の荒蕪が開けたならば、土地の荒蕪は何万町歩あらうと心配することはないからである。そなたの村(相州金目村片岡、現在平塚市の内)のごときは、そなたの兄(大沢小才太)一人の心の開拓ができただけで、一村がすみやかに一新したではないか。大学に、「明徳を明らかにするにあり、民を新にするにあり、至善に止まるにあり」とある。明徳を明らかにするとは心の開拓をいうのである。そなたの兄の明徳が少しばかり明らかになったら、すぐに一村の人民が新たに変わった。「徳の流行する、置郵(駅伝)して命を伝うるより速かなり」(孟子、公孫丑上篇)とはこのことである。国へ帰ったならば、速く至善にとどまる法を立てて、父祖の恩に報いるがよい。これがそなたの専一に努めるべきことである。

(前掲『夜話』六二〜六三ページ)

これこそまさに、精神の善の力を高めるといふ意味で、生産力の生産力、善を生産する生産力を

生み出す「心の善の生産力」の開発こそが、第一優先順位に来るべきことを物語るものである。
 二宮尊徳は、江戸末期の封建社会に活動した人であるが、「徳と報徳」という思想で自ら行動し、また農民はもちろん、武士階級をも指導して、産業開発と藩政改革に相当な成果を上げたといわれる。現代の会社活動も報徳の行為として行うならば、われわれに深い意味づけと強い実行力とを与えるのではなからうか。

考えてみると、先にも少々ふれたが、「恩と報恩」、「徳と報徳」、それに「善と産善」（積善、善の再生産）は、古来、そして洋の東西ともに、人類の思想史に現れた三つの平行概念であり、今後にも有益な指針となるのではないか。「産善」は筆者が造った当面の造語であるが、「積善」といってもよく、ともかく善の概念は古代ギリシア以来のものであるし、東洋にも連綿と存在してきたもので、人類に普遍的な考えなのである。²⁴⁾

〈注〉

(24) 先ず、徳の概念は存在するものに内蔵する「可能性」(dynamis, potentiality)としての本性、能力、力であり、報徳は人間が自らの徳を高めて自然界と人間界の徳を発現させるといふ活動である。
 次に、恩の概念は徳やその成果を「恵み」として頂くこと、報恩はその恵みを活かして恩を恵んで下さる存在や人に報いる、お返しすることに注目する。

さらに、善の概念も古代から洋の東西にわたって存在してきているが、徳と恩との両方をふまえて、人間の価値観によって活動を評価する立場であり、報徳と報恩を統合して「産善」（積善）という再生産活動をとらえようとするのである。この新しい理論から、倫理や道徳を定式化し、三方善を理解し直し、三方善の活動を普及させる必要がある。

(三) 三方善の究極

結局、三方善については、取り違えてはならない奥義が存在するわけである。三方善とはすなわち善の分かち合いであるが、どのような種類の善の分かち合いであるかといえば、もちろん、すべての種類の善の分かち合いである。しかし、最も根本的な分かち合いは、「結果としての具体的な形の善」の分かち合いにあるのではない、という事実である。

もちろん、それも緊急であり有効な場合もある。例えば、筆者もその目にあつたが、急性の心臓病が発症した場合には、医薬を動員し、手術のために援助することも有効である。飢饉や災害のときにも、食料や衣料、家屋、医薬の支援は、絶対に必要かつ有効である。そうした危機つまり非常時のほかには、「いのち」に必要な善を生産する「生産力」を、各自の心身内部において、自ら発芽させ生育させるための援助が有効である。

しかし、肝心なことは、善を生産する生産力を生み出す生産力、つまり生産力のそのまた根源にある「生産力」、「生産力の生産力」を強めるように、お互い扶助することなのである。飢えている人にすぐに食べられる魚を提供することは、緊急措置としては妥当であるが、いつまでもそうするばかりでは、飢える人は永久になくならないだろう。自分で魚を獲る方法を身につけるように教え、自分の力をつけるようにしなければならぬのである。

どこの民族も、しっかりした民族であれば、「善を分かち合いなさい」という「愛や慈悲の教え」を有するものである。各自は自分自身で生命力を培養し、それを困っている人、苦しんでいる人、

不足している人に援助しなさい、と。しかし、そのときあわせて肝心なことは、そういう境遇にある各人が、自分の治癒力を回復し、自らの知恵と努力をもって問題解決する力を高め、自分の頭で、自分の体で、歩みを進めるようになってほしい——そう願いながら支援することである。²⁵⁾

身近なことを引き合いにしていえば、親は年を取り、いつまでも子供の面倒を見ることはできないから、一般に親世代の義務とは親がこの世を去った後に子供自身が自分で自立するようにと、子供を育てることにある。つまり、「いつまでもあると思うな親と金」という格言は、個々の家族にとどまらず、人間界の全体における「善の再生産理論」から見て、やはり真理を表しているのである。人類社会としては、人類として——必ずしも個々の家族に限らず——子孫をもうけ、このように子孫世代を教育することが、最終の善事なのである。²⁶⁾

〈注〉

(25) このいわゆる「魚のとり方を教える」という自立の考え方には要注意である。もしも、社会の制度や文化という公共財に人間差別を生み出すような「病理」が内在している場合には、もちろんそれを取り除き、かつ特別な支援策 (affirmative action, normalization) を適切に講じ、広い意味での法の下の平等を確保するのでなくてはならない。そのような公共善における歪みを放置して個々の人にのみ

責任を帰する見方は、科学的ではない。科学的で行き届いた観点に立つこと自身、心の善の生産力の不可欠な内実なのである。さもなくばわれわれは、「神の平等愛」の水準に到達しない。

(26) ところで、人が来世を求めるあまりに、現世を軽んじるならば、それは根本的に誤りである、と二宮尊徳は次のように論ずる。

仏教には、この世は仮の宿といい、来世こそ大切であると言くものがある。もちろん来世は大切であるが、草にたとえれば、よい実を実らせるといよいよ来世を得るためには、現世において立派な育て方をしなければならぬ。地獄は現世で悪事を行った者の行くところ、極楽は善を行った者のみの行くところとは、火を見るよりあきらかである。

〔二宮翁夜話〕上巻、一三九—一四〇ページ

現世の暮らし方と無関係であるような来世はないのである。キリスト教やイスラム教は来世を強調するが、そのとき、若干は他の宗教諸派にも、「予定説」というものがあった。現世の暮らし方が善であるのが悪であろうが、人間の善行悪行にかかわらず、「神の救い」は誰に下るかすでに予定されている、という。それは人間を必死に駆り立て救いに向けて模索させる傾向を秘めているが、それと同時に、はたして自分は救いへと選ばれているのだろうか、と人間を必要以上に不安に陥れる「預言」でもあり、その結果、人間の「火あぶり」を行わせるなど好ましくない影響を人類史にもたらす傾向が強かった。もしも、神の人間に対する心が、人間にはまったく

分らないようなものならば、神を説く意味などないではないか。『聖書』は、その文言は、何のためにあると言おうのだろうか。

そしてさらに、善の再生産においては、自己の魂の行く末とともに、子孫の永続が重大な意味を帯びる。われわれは子孫が永続するという道を通じて、善を永遠に再生産したいと願う。

とはいえ、善の再生産ではそれを家族内部に限定する必要は少しもない。やむを得ない不妊により実の子供を授けられない人は、自分の家族の子孫にこだわらず、人類の次世代のために他の人間生命を育てればよい。むしろそのほうが、自分の家族に注意を集中するという救いのエゴイズムを乗り越えることができ、崇高な精神善の生産のモデルとなる。

幾つかの優れた世界宗教が、タブーとして聖職者の結婚と生殖を禁じるのは、この意味の「精神善の生産」を、多くの他の普通の人類に代わって、彼らが「純粹」に実行して見せ、人類全体が救いに到達するため、彼らが一助となりなさい、という神から与えられた貴重な使命があるのである。つまり「身を殺して仁をなす」に相当する聖なる行為なのである。お互いがそのように考えて、養子や孤児養育や

他者救済や教育活動に努めれば、誰にも目をかけられず身寄りのないまま淋しさに泣き、あるいは自暴自棄になる、というような境遇の孤児は世の中からいなくなるであろう。

それゆえ、自分の家系だけにこだわり過ぎ、子供

のいないことで悲しみに囚われるのは、神仏の心に照らして残念なことなのである。人々よ、あなたがたにはもつと広大な役目のあることに、気づこうではないか。

【資料】三方よし

——自分にも相手方にも第三者にも都合よく——

中 田 中^{みづ}

今までの道徳は、自分と自分の仲間のことだけを考えて、第三者のことは考慮しなかったのです。ところが、聖人の教えでは、自分も相手も、そうして、第三者のことまでも考えていくことが、真の道徳であるというのであります。

そこで、廣池博士（当時の門下の人たちは法学博士廣池をこのように呼んでいた。「博士」の学位は大正・昭和初年の当時はことに稀少価値を帯び、師に対する一種の尊称であった——永安）はこの教えに従って、すべてが都合よくいくように、いつも三方よしということを考えてやっておられました。またこうした教えを自ら体験され、いくたびか私達門人にも実際をもって教訓されたのであります。

昭和三年（『廣池千九郎日記』③二五三ページでは昭和四年とある——永安）の三月十六日のことでした。長崎県の島原に行く途中の出来事です。その時の用事は、東京で博士のお話を聞いておられた人が、郷里の三田尻^{みたじり}へ博士を迎えて、その人の親戚の方々に、博士のお話を聞かせたいという依頼で、その日の午後七時までに、三田尻駅前にあった石田旅館へ行くことでした。

当時、特急富士というのがあって、それで出かけたわけですが、途中戸田^{とだ}というところまできた時のことです。

汽車がその戸田駅に停車しますと、乗務員から、

「次の富海^{とみみ}へ出るところのトンネルが崩れて、これからさきは運転出来ないのので下車して下さい」と連絡がありました。

私達は驚いて、窓から顔をだして見ますと、汽車の後部の方では、枕木とか、夜照明に使うアセチレンガスなど、その他いろんな復興材を下しているのです。

トンネルが崩れていたことは、すでに乗務員にはわかっていたことなのですが、お客にそれをもつて伝えると、騒ぐので、この時まで、内密にしていたわけでしょう。

その時が、午後の四時頃だったと思います。私達は、車掌に何時に開通するかとたずねてみましたところ、

「午後の十一時頃に開通する見込みです」という返事でした。

私達は午後の七時までに、三田尻の石田旅館に行かなければならないのですから、開通するまで、まっついでには、大変なことになります。

この特急は一、二等の客車ばかりですから、乗っているお客さんも相当の用事をもった人達ばかりであったでしょう。駅前には、てんやわんやの大騒ぎでした。

この時、博士に随行していたのが、私のほかに丸井（熊吉——永安）さんでしたが、私は自動車で行かなければ間にあわないと思ひまして早速、駅前のタクシーのところにとんでゆきました。いろいろ交渉した結果、そこから三田尻までの距離が、十五キロ七百もありましたが、二十円で行くことに契約してくれました。

その駅には赤帽もないので、私達で荷物を運んで、その自動車につみこみ、まず博士が乗られて、それから私達も一緒に乗って出発しようとした時、そこへ四十五、六の、風采もいやしくない会社員風の男の人が、やってきまして、

「私は長崎の三菱にいるものですが、重要な任務があつて、明日正午までにどうしても長崎まで行かなければなりません、一緒に乗せてもらえませんか」といふのです。

戸田の駅は田舎ですから、自動車が、二台しかございません。それに一台はすでに外へ出てしまつていたので、私達の約束した自動車しかなかったのです。

そこで丸井さんは、

「よろしい乗つてゆきなさい」

といわれました。そこへまた一人の女学生風の娘がやってきて、

「私は二日市の者ですが親が危篤だという電報がきましたので、どうしても、すぐ行かなければなりません、一緒に乗せて行つてくれませんか」といふのです。

丸井さんは、この人にも「よろしい」とあつさりいわれて、さてその人達も車に乗りこもうとした瞬間でした。博士は「ちよつとまちなさい」といわれて、それから「私達は、三田尻まで行くのですが、そこまで、私達三人で、二十円の契約をしたのです。今、あなた達が二人乗れば、それだけ重みがかかつて、ガソリンがよけいにいるでしょう。それにタイヤもいたむでしょう。また私達は三人のところを、五人になりますから、それだけきゆうくつな思いをしなければならぬのです。それで、私達も一人ずつ出しますから、あなた達も一人五円ずつ出しなさい」と話されてから、また運転手に、

「三人のところ五人乗りますから、それだけ、ガソリンも多くいるでしょう。タイヤもいたむだろうから、最初の契約よりも五円多く出すことになりましたが、それでよろしいか」と聞き正されますと、運転手の方も、

「それで結構です」

といふのです。

それからまた説明をつけ加えられました。

「私達は最初、二十円で契約をしたのだから、あなた達を無料で同乗させてあげるとは、少しもさしつかえないが、そういうことをしたのでは、運転手さんは、契約と違うから、不愉快な思いをしなければならぬでしょう。そこであなた達もお金を少し出せば、それだけ運転手さんには多く払うことになり、あなた達も都合よく気軽に乗ってゆかれるし、また私達も、きゆうくつな思いはしなければならぬが、五円だけ安くゆけることになるので、これで三方どちらも、よいことになるでしょう」といわれたのです。

そこは幸いうまくゆきましたが、石田旅館に着いてからのことでした。博士が私達におっしゃるのに、

「おまへたちは、なんでも、人からいわれることを、ああよろしい、ああよろしいといってしまうが、それはただの同情、親切というものだ。私達は最初の契約を二十円でしたから、何人乗せてもかまわないようなもの、はたしてそういうことをして、運転手はどう思うだろうか。またあの人達が、親が危篤だとか、重要な任務があるとかいっていたが、そういうことがどこまでほんとうなのか、話しただけでは相手の真偽は、わかるものでない。同情したり親切にしてあげたりすれば、相手は喜びもし感謝もするだろうが、そうしたからといって、その人達が、これから、少しでもよくなつて、人の為に尽くそうなどとは考えるわけでもないだろう。あの人達がいつて

いた重要な任務だ、なんだということ、みな自分の為のみやっていることだから、それを考えないで、ただなんでも人に同情、親切にすることが道徳であるかのように思つてやったところで、なんにもならない。もちろん、同情も親切も必要だが、ただそれだけがよい事だと思つてやっていたのでは、少しもよい結果は得られない。今後もっと注意してやらなければいかん」と、このように教えられもし、叱られもしたわけです。

自分だけのことを考えてやるのは、不道徳でも出来ません。また自分と相手のことだけ考えてやるだけなら、あまり、知恵がなくても出来ることなのです。ところがすべてが、都合よくやつてゆけるようにするためには自分も相手も、第三者のことまでも、考えてゆかねばなりません。そのためには非常に知恵がいるのです。

ここで博士は、いろいろ問題に当たりますと、即座に、その場で、すべてが都合よくゆくような解決方法をお考えになつておられました。

私達は博士に随行しているんな事件に出くわしたのですが、それは教えを受けるために事件が起つたのではないかとさえ思われます。

〔「れいろう」昭和三四年二月号、二〇〇〜二二二ページ、ルビ付加〕

廣池千九郎については、『伝記廣池千九郎』（モラロジー研究所、二〇〇一年）を参照されたい。中田中氏は、商社勤務と軍人の経験もあり、庶務総務に極めて明るく、早くから廣池に師事し、専

任の随行者となった。丸井熊吉氏は東京と大阪でガラス工場を経営しており、廣池の道德説に感激してしばしば随行し、経営上の指導を受けるとともに、廣池に奉仕した。その後、昭和十三年六月に廣池は死去するが、廣池亡きあとも、周囲からの疎開のすすめも眼中になく東京に住み続けて道徳の普及に尽力していたが、残念なことに昭和二十年三月の東京大空襲で罹災し人生を了えた。

【補論】三方善研究に役立つ諸理論

三方善の精緻な研究のためには、これまでに人類が開発し共有してきたさまざまな分析用具が使えるであろう。私が常日頃参照しているものの例を、以下に一括して掲げておこう。他にもすぐれた理論や実例があると予想されるので、読者諸賢のご教示をお願いしたい。

(一) 経済学の領域

私的善の共存と調和については、先ず古典学派の哲学の基礎としてアダム・スミスの「同感」(sympathy)の理論がある。次いで、二十世紀新古典派におけるミクロ経済学の諸理論は、それを精神善(財)を含むように解釈し直して拡張すれば、かなりのものが有用である。例えば、生産関数と消費関数、各種の財(善)についての市場における需要供給の均衡理論、パレート最適の概念、独占や寡占の理論、総じて「一般均衡理論」(general equilibrium theory)がそれである。

こうした領域については、現代の標準的な経済学教科書のいずれにも見いだされるが、さらに、厚生経済学(welfare economics)と呼ばれる分野も三方善にかかわる研究である。他方、ケネス・ボールドディングの一連の労作は、そうした経済学の分析手法を概念的に一層発展させようとする試みであった。特に、Beyond Economics(『経済学を超えて』学習研究社)、Ecodynamics(『地球社会どこへ行く』講談社学術文庫)は有益な示唆が溢れている。

経済というより「企業」や「組織体」の経営に焦点を当てている「経営学」は、公共性の研究に応用できるもののもう一つの宝庫である。そこには実践的な知見と技術とが満ちている。ビジネス・エシックスは特に有益である。世の中に三方善ということが実現すべき理想だとする「会社経営の研究」は決して多くはないが、昔から良質の会社経営の一貫した哲学であったといえる。論語と算盤といって儒教にもとづく「義と利との一致」を目指した澁澤榮一の経営哲学があり、明治大正の時代のもっとも標準的なものである。土屋喬雄『日本経営理念史』(復刻、麗澤大学出版会、二〇〇二年)を参照。なお、本文で触れた廣池千九郎の道德科学(モラロジー)においては、実践的経営学の観点からの研究として、目黒章布『広池博士の経営指導の研究』、田島政芳『道経一体と三方よしの経営』、モラロジー研究所編『道德経済一体思想』、同編の『経営原論』及び『三方善の経営』(いずれもモラロジー研究所刊)をあげることができる。

(二) 公共性(公共財)の研究の領域

経済学における私的善の理論のみでは現実社会の把握に不十分であるところから、特に「公共財」

の取り扱いについて、二十世紀初めより、諸種の分析法が開発されつつある。すなわちA・C・ピグー以来の「外部性」(externality)の理論と「公共財」(public goods)の研究がそれであって、経済理論では、「私的財」(private goods)のみを前提とした理論体系からはみ出すものとして、この領域がますます重要となってきた。

実は、「人類の社会は、隅から隅まで私的領域に分割し尽くされる筈のもので、国防や治安でさえ、民間の傭兵や警察を使って済ませることが可能であって、国家や自治体など公共体の働きは不要なものとすることができる」という極論もありうる。しかしこれは、今日の人智の発展段階では、現実性を持たない主張だろう。各人はそれほど強い自己維持力と自己責任原則を実行できない。

公共性 (publicness) の研究は、旧来の政治学や社会学、それに社会システム論といった新興の学問においても進んでいる。元々、「共有地」を意味する「コモンズ」(commonの複数形)の研究は、日本でもかの有名な「小繋事件」^{こつな}はじめ、「入会」(いりあい)の紛争の研究として、早くから行われてきている。

また、政治の研究は、本来、三方善の理念とその実現の研究そのものであるといつてよい。政治学は、何が人間集団にとっての公共善 (bonum commune) であるか、そしてそれを決定し、実現するための社会システムとは何か、という主題に取り組んできたからである。主流政治学における古典的な古典派の一人といつてよい古代ギリシアのアリストテレスには『政治学』とともに『倫理学』があり、『政治学』は人間社会の公共善とは何かを考察し、その前提として『倫理学』は、人

間の一人ひとりの望ましい「有徳の生活」を解明して「真理を見つめる生活」とし、そういう各人の生き方が集団社会においていかにすれば可能であるかを探求する。この二人については、『全集』が出ている。

近代の民主主義の思想と理論は、個人主義に立たない古代のそれと異なり、個人主義と自由主義とが結びついたものであって、社会全体の場における自由な諸個人の私的善の主張をどのようにして折り合わせるかを探求するものにほかならない。そして、民主主義はその考え方であり哲学である。しかしそれは、適切なリーダーや代表を得ることなしには成功が覚束ないシステムなのであって、この側面から見れば、「民主主義とは良きリーダー、良き代表を選ぶための、自由競争的方法である」(J・A・シュンペーター『資本主義・社会主義・民主主義』)とさえいえよう。いくら情報通信技術が発展し、社会の意思決定が広範囲にわたってスピードアップされるようになり、ネットワーク革命が進んだにしても、この考えは相変らず妥当するのではないか。

今は二十一世紀初頭、公共性の研究が再び一種の流行になりつつあるが、政治学のみというより広く社会諸科学を動員したものととして、佐々木・金共編『公共哲学』(東京大学出版会)全十巻は、画期的な成果といえる。

(三) その他の諸領域

古い伝統を有する「法学」(Jurisprudence)の分野では、いわゆる「共有」の概念が今日の共

有財問題を取り扱ううえで必須であるが、同じく共有といっても、「総有」「含有」「狭い意味の共有」などがあるので、それぞれの概念を動員すればよい。法学は、そもそも公共善という理想価値を実現するための社会ルールの研究であり、人類社会における相互作用ルールを「強制ルール」として規定するものであって、排他的な私的所有（権）の理論がその基本にある。（川島武宜『所有権法の理論』岩波書店、一九八七年、参照）法学はまた、所有と所有とが接触する相隣関係の処理にも対処する専門学である。

この点、社会学・文化人類学の業績も大切である。いくら人は個人個人で異なる存在とはいえ、どんな社会にも「集団主義」というものが働いている。そもそも「人間」という言葉自体が「人のあいだ」という意味を内蔵している。集団主義は、現れ方は違うけれども、人類社会における人間関係の連帯原理の一側面であって、どこの民族にも国家社会にも存在するものである。この事実を忘れてはならない。かつて日本の集団主義について、それが一種の優越感情と羨望感情を込めてもてはやされているころ、冷めた分析理性を失わずにそれを研究したものに、濱口恵俊・公文俊平編『日本的集団主義―その真価を問う』（有斐閣、一九八二年）、及び、日本社会の優越意識のほとぼりが冷めたころの出版として濱口恵俊『日本研究原論』（有斐閣、一九九八年）がある。

また、「交渉術」の研究領域も参照すべきであろう。これは外交や紛争の解決のために発達してきたものであって、手法として、ゲーム論などの知見を応用し、心理学も動員して、現実的な技術を開示してくれる。その一例は日本にも紹介されているハーバード大学の一連の交渉研究（「ハー

バード交渉術」など）、それと先に述べたポールディング教授の手になる『紛争の一般理論』という先駆的研究もある。

さらに、「カウンセリング」の領域で開発されてきている各種の「心理的技術」にも有効なものが多いように思う。カウンセリングの対象とする局面は個人の心のシステム（心の善の働く場）の中での問題だが、実は個人の心身を中心舞台とするマイクロ次元での、人と人との間という「人間場」（contextual space）での紛争や対立、不調和であり、それこそ一方善と一方善とのせめぎ合いがその根底にあり、そのせめぎ合いを、事実の「解釈」つまり「受けとめ方」「考え方」の改善によって乗り越えようとするもの——心理技術——であって、三方善の実現のためにマイクロの局面で今以上に参照されるべき智恵を見いだせる。

三方善の実現にとって、家族を「システム」と見る立場は有効である。一般のシステム論の見方については、拙著『社会科学のこころ』（成文堂、一九八九年）で詳しく説明しておいた。特に「ホロン」という見方は個々の人間のとらえ方として有益であり、この見方が普及するならば、思慮の足りぬ個人論から「真の個人」論へと人間観の更生（コンヴァージョン）を促すであろう。

以上、三方善はあまねく妥当する理想目的であるが、どんな思想的立場をとるかの違いは残る。ただ、その違いは主に三方善という目的を実現する方法についての見解の差異でしかない。人類はこれからも、三方善について考え続け、探求し続けねばならないであろう。三方善への道は「わけてもわけても青い山」（山頭火）なのである。

The Theory and Practice of the Triad of Goodness: Deepening the Theory and Practice of Ethics and Morality.

Nagayasu Yukimasa

Professor and Advisor to the Research Centre for Moral Science

Human beings have several fundamental values, such as truth, beauty, goodness, the sacred and wealth. Among these, goodness (bonum) is properly related to ethics or morality. In this field, all human conduct is measured by the standard of goodness and badness. In other words, ethics or morality is a professional kind of discipline and a system of guidelines for human action based upon the value of goodness. Goodness is, on the one hand, divided into two kinds, the aim and instrument. On the other hand, it is also divided into the private good and the public good. Ethics or morality is finally a system of effective principles for the increase and accumulation of human happiness, that is, joy and peace of mind. To distribute fairly the happiness that results from absolute goodness among the members of a society with suitable amounts of instrumental goodness is called the triad of goodness. The aim of ethics or morality is then to actualize a fair distribution of the triad of goodness between you, I and a third party.

Such a view of goodness makes it possible to construct a reproduction theory of goodness that has three stages. The first stage is receiving seeds of goodness from nature and history, the second is the growing of the seeds, and the third is allocating goodness as products. In this reproduction process, public goods play necessary and important roles in increasing goodness by avoiding negatives that are byproducts of goodness. The most complex task the triad of goodness has to overcome is to avoid the so-called 'tragedy of commons' described by Garrett Hardin. In this tragedy, common property is devalued or even destroyed by its selfish use. The key point in attaining the triad of goodness among three parties in a fair way is to control the tragedy in the use of common goods. Human society is still only at the stage of exploring rational methods to respond to this need.

Furthermore, we should take notice of methods to maximize the productive power of goodness. Needless to say, while the productive power of goodness is human energy, the most original manifestation is the power of mind, the productive power to generate the energy. The essence of original power is wisdom and human virtue. In this sense the task of ethics or morality is to develop pure, non-selfish and creative mind power.

Taking the case of a company, as one of the applications of the triad of goodness, necessary ways to its achievement are summarized. It is very difficult in modern society for a company to approach to the triad of goodness because of market competition, which can easily cause environmental pollution, speculation and many other kinds of malpractice. Several steps, as a second best, should nevertheless be proposed in order to get to the triad of goodness.

Finally there is brief mention of the fact that, in human history, there are basic philosophical concepts like virtue, grace, and goodness that constitute the fundamentals of ethics and morality. These concepts can be integrated with modern scientific concepts. To explore such a field is the next task.